
天才魔法使いの天災な弟子

中原まなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天才魔法使いの天災な弟子

【Nコード】

N2309W

【作者名】

中原まなみ

【あらすじ】

スレヴィの村の外れにある鬱蒼とした『死の森』には、かつて『天才』と称された魔法使いが住んでいる。

ある日、彼が森の中で拾ったのは『天災』と呼ばれ、村から追放されたひとりの少女だった――

ふたりのテンサイが紡ぐ、ドラマチックファンタジー

緋色だった。

木々も家々も、空も風でさえも、すべてが緋色に染め変えられていた。空気は熱を持ち、吹き出た汗さえも流れ出る前に乾かしてしまっていた。

その中に彼女はいた。柔らかく波打つ緑色の髪もまた緋色に照らされながら、それでも静かに佇んでいた。彼女の足元には、まだ幼い彼女の妹がいる。その子もまた、艶やかな緑の髪を緋色で照らされながら、澄んだ瞳をこちらに向けていた。

糾弾されているようだ、と、彼は思った。

あながちそれは間違いではなかったのかもしれない。

目の前の少女は、翡翠の瞳を、一遍の揺らぎもなくこちらに向け て言った。

「わたしたちは、生きてはいけないのですか？」

問いかけ。それは残酷な言葉だった。柔らかで、けれど鋭利な刃物と変わらなかった。まだ十四を迎えたばかりの彼に、答える術などなかった。

襟元につけた印章は、確かに誇りであるはずなのに、けれどそのときの彼にとっては重く感じられる、ただそれだけの代物になっていた。

答えなければならない。

判っていた。しかし、熱に煽られ乾いた唇からは、一欠けの音も出ない。

ふいに、少女が目を伏せた。何かを諦めた表情だった。足もとにしがみつく、さらに幼い少女へと囁く。

「行きましょう」

白い手が、ちいさな背中を押す。幼子は踵を返し、こちらに背を向けた。彼女もまた、こちらに背を向ける。そして、まだ燃え盛る

彼女たちの村へと歩を進めだした。

「——待、て！」

その時になつてようやく、張り付いた喉からひしゃげた声が漏れた。彼女の足が止まる。けれど、振り返つては来なかった。返つてきたのは、静かな声音だけだった。

「わたしは地の民、シュシュリ。貴方は？」

「僕……は」

喉が痛い。それは、焼けた空気を吸い込んだせいだろうか。

「宮廷魔法師……ミズガルド」

「そう」

ゆつくりと——火の海を背に、彼女が振り返った。その顔には、泣き出しそうな笑みが浮かんでいた。

「さようなら、ミズガルド」

断絶の言葉。

それを最後に、彼女は幼い妹と手を繋ぎ火の海へと駆け出した。ミズガルドの伸ばしかけた手は、何も掴むことなく、ただ空を掻いた。

すぐに、ふたりの背は緋色の世界へと飲み込まれていく。

緋色だった。

その夜はすべて、何もかもが、ただ、緋色に染まっていた。

1（後書き）

少女小説の予定ですが、ライトノベルにもあたるかもしれません。

自分にノルマを課すために、出来る限り毎日更新していければと考えております。

普段は書きあがって推敲してから出ないと載せないのですが、今回の書いた端からアップはいささか不安が残りますが（笑）、お付き合いいただければ幸いです。

葉は白かった。葉脈は白く透き通っている。幹は生気を失った色をしていて、しかし何故か枯れずに天に向かって伸びている。

ここ、スレヴィの森にある木々はだいたい同じようなものだった。数年前から死化が始まり、森の大部分が今はもうこの死病に侵され白くなっている。いつしか、死の森、とさえ呼ばれるようになっていた。

死化した木々の合間を、トステイナは重い足取りで歩いていた。ふ、と短く息を吐いて空を仰ぐ。元気な木だったら良かったのに。そっと、口中で呟いた。元気な、青々しい緑の木々であれば、この時期の暴力的な陽光さえ多少は遮ってくれただろう。けれど、この死化した葉では陽光はそのまますり抜けてしまうので、遮るものはないに等しい。

肩から斜めに下げていた水筒に手が触れる。同時に、暗澹たる気持ちになった。何度目だろうか。こうして同じ気持ちを繰り返すのは。何度振っても逆さまにしても、水筒の中にもう水は一滴も残ってはいない。

暑い。けれど、いつしか汗も掻かなくなっていた。最初のうちは暑い、とか、喉が渴いた、とか呟いてもいたのだが、そのうち呟くだけ乾いていくだけだと気付いてやめた。

ただ重い足を、ゆっくり動かすだけだ。

スレヴィの森は広い。そんなことは子供の頃から知ってはいたはずだが、実感として理解したのは今日が初めてだった。村を出て、どれくらい経ったかは判らない。街へ抜けるための近道があったはず、と不用意に知らない道へと足を踏み込んだのが間違いだった。街へ抜ける道は見当たらず、いつしか村へ戻る道も見失った。結局こうして、ただただ歩き続けるしか出来なくなってしまった。

ふいに、視界がぐるっ、と廻った。

（え——？）

声を出す前に、軽い衝撃とともに土を食んでいた。苦い。心臓がどくどくと早鐘を打っている。その頃になってようやく、自分が倒れたのだとトステイナは理解した。

（あれ……困りました……）

不安定に揺れる地面の上で、目をぱちくりと瞬いては何とか意識を保とうとするのだが、上手く行っている気がしなかった。ぐるぐると白い葉が廻る空を見上げる。

気持ち悪い。けれど、何となく美しいとさえ思った。

白い葉。青い空。太陽を反射する自らの金色の髪。それらがぐるぐると回転する世界。

（きれい……だあ）

浮遊感。熱に浮かされたようにそれを感じながら、トステイナはそうつと目を閉じる。まぶたの裏にちらつく赤や黄色の斑点が、それもまた踊っているかのように見えた。

このまま眠れたら気持ちいいかな。ぼんやりとした思考の隅で考えた。その時だった。

ガサリ——と。

今まで歩き続けていて聞いたことのある、風の揺らす葉擦れの音とはまったく異質の音にトステイナはぱちりと目を開いた。

視界に飛び込んできた土を見て、これじゃない、と理解する。重い頭を何とか持ち上げる。

人がいた。

降り注ぐ陽射しを吸収してしまいそうな黒い髪。驚いているのか、見開いた目は陽光を反射する茶色だった。寝転がった状態のトステイナからはよく判らないが、たぶん背はトステイナよりはずっと高い。

（男の人……）

まだふわふわした頭のまま理解できたのはその程度だった。あとはそう、恐らく何かを採取していたのだろう——籠らしき物を抱え

ているということ。

ただしそれは、トステイナにとっては無用な情報だった。

人がいた。それだけが、大きなひとつの情報として脳裏に焼きついていく。そして、人がいたのなら、そしてそれが見かけたことのない顔なら、することはひとつだった。少なくともトステイナにとつてはそうだった。

倒れていた体を、何とか座る体勢にまで持っていく。そして、トステイナは微笑った。

「こんにちは」

——そして、トステイナは意識を手放した。

火はいずこ

地は絶えた

水はまだある

風はやまない

養父の目はいつも何かに怯えているようだった。あるいは、痛みを抱えているかのようでさえあった。トステイナは何度かその理由を問おうとして、結局一度も問わなかった。怖かったのは、返ってくる答えが、もし自分を拒否するものだったらということだった。

それでも、養父は優しくかった。

低く、よく響く声で紡がれる言葉のひとつひとつに、優しさが織られていたことをトステイナはよく知っていた。

——トステイナ。これは判るかい？

——トステイナ。しっかりと食べなさい。

——トステイナ。こら。それはいけないことだ。

時々にはティナ、と愛称で呼んでくれた。養父とはいえ、スレヴィの村の長である彼とトステイナの間は、親子というよりも祖父と孫

ほどの歳の差があつた。だからトステイナは養父をいつもおじいちゃん、と呼んだ。

その養父は、最後の日とても哀しい目をしていた。

—— テイナ。

—— はい。

—— 私たちを恨むかい？

静かな声音に、トステイナは何も答えなかった。 　　「どう言えば養父を哀しませないですむのか、結局判らなかつたから。」

—— どうか。

ゆらゆらと。夜の闇のように視界が揺れている。

その闇の中。擦れた声で、養父は言つた。

—— どうか、生きてくれ。トステイナ。

響いてくる声に頷いた。

—— はい。

強く、頷く。

—— はい、おじいちゃん。…… 生きてます。

生きてます。

「—— 生きてンのかい？ この嬢ちゃん」

ふいに明朗な声が闇を割つて入ってきた。

「え……！？」

おじいちゃんの声じゃない。瞬きし——

「ひゃあ！？」

トステイナは素つ頓狂な悲鳴を上げた。身を起こし、思わずおしりで後退さる。が、すぐに背中がなにかに当たつた。

「あんれ。驚いてらア。生きてンのなア」

不思議な抑揚がついた言葉で、トステイナを覗き込んでいた少年は言つた。

「え。え？」

トステイナは緑玉の瞳を丸くしながら、少年を見上げる。そう、見上げる必要があった。それは身長差といった話ではない。何故なら少年は、浮いていたからだ。

空中にふわふわと、支えるものもない状態で彼は浮いていた。ツンツンととがった白い髪。夜空のような藍色の目。色彩は少し変わっているとしても、体格はトステイナとそう変わらない歳の少年に思えた。けれど、違う。人はそんな風にプカプカ浮いたりはいはずだ。

それに。と混乱する頭の中でトステイナは何とか考える。知らない人だった。見たこともない人が、何故自分を覗き込んでいたのか。

だが、何となく判った。悪意はない、ようだ。その頃になつてようやく、自分のいる場所が見えてきた。どこかの家の部屋、だろうか。客室か何かに思えた。質素ではあるがしつかりとした作りの家具や調度品が、必要最低限並べられている。自分はその部屋の隅、窓際の寝台に寝かされているのだと気付く。

「あ、あの」

「はいよオ。なんだイ？」

「こ、ここ、何処れしょうか」

混乱のせいか、呂律が上手く廻らない。それでも何とか言葉を発したトステイナの耳に、またひとつ、別の声が触れた。

「起きたのか」

低く、心地よい声音。それは扉のほうだった。目をやる。

「――あ！」

トステイナは思わず高い声を上げていた。そこに立っていたのは、黒髪の男だった。歩きづらそうな黒の長衣を着ている。その顔立ちに、記憶が蘇ってきた。

森の中、気を失う直前に見た顔だった。ほっと、安堵の息が漏れる。

「こ、こんにちは」

笑いかける。が、返ってきたのは苦虫を噛み潰したような顔だった。歳はトステイナより十近く上だろうか。二十を過ぎていくつか、というように見えた。しかし面立ちのせい、というよりは浮かべている表情のせいでもう少し上にも見える。目鼻立ちのはっきりとした、整った顔ではあるのだが、どうにも重たさが抜けない。

彼はその難しい顔のまま、つかつかとトステイナに歩み寄ってきた。彼の後ろから、猫が二匹、とことこついて来ている。

「気分は」

短い言葉。それが自分に掛けられていると判ってトステイナは慌てた。

「え、えと。えっと。あ、喉が渴きました」

「ああ、だろうな」

彼は小さく頷き、「アグロア」と傍で浮いていた少年に声を掛けた。

「水」

「ヘイヘイ。民使いの荒エ兄ちゃんだぜ、まったく」

肩をすくめて言ったとたん、部屋に風が吹いた。反射的に目を閉じ、そして開いたときにはそこに少年の姿はなかった。

「……あれ？」

「あれは風だからな。すぐ戻る」

「そのとおりさア！」

「わっ」

短く声を上げてしまった。瞬きもしないうちに、白髪の少年はまたそこに浮かんでいる。

「へへっ、オイラア、風だからなア。ほら、嬢ちゃん水だぜエ」

差し出された木の杯を受け取る。水がたっぷりと入っていた。恐る恐る口をつける。ひとくち飲んですぐ、トステイナはまた小さく声を上げていた。

「つめたい」

水が喉を過ぎていくのが確かに判るほど、キリッと冷えていた。

この時期なのに、と二度、三度と瞬いてから顔を上げる。

「冷やしてあったからだ」

「はあ」

曖昧に頷く。体が水を欲していたので立て続けに二、三口と飲んでからようやく落ち着いた。大きく息を吐く。

「あのお」

「なんだ」

「ここ、何処でしょうか」

問いかけに、男性の眉間に皺が寄った。やはり少ししかめっ面だ。言い忘れていたか。俺の家だ」

「……何処にあるんでしょう」

「スレヴィの森中サア」

——と、これは白髪の少年のほうだ。

「えと」

「アグロアでいいゼイ、お嬢ちゃん。なんだい？」

「あ、えと。スレヴィの森の中に住んでらっしゃるんですか？」

「ああ。こいつア、偏屈なのサア」

にこつと、アグロアが笑った。八重歯がのぞく幼い笑顔だ。それと相反するかのような表情を浮かべた男性が、低く息を吐く。

「アグロア。少し黙ってる」

「はいよオ」

「——それで？」

おじいちゃんみたいだ。と、とつさに思った。だがそれを口にすればこの男性の眉間の皺がさらに深くなることは、さすがにトステイナにも容易に判ったので口にしなかった。だが、よく似ていると思う。養父が叱る時の口調にそっくりだった。その養父に酷似した口調のまま、彼は続けた。

「君、歳は」

「じゅつ、じゅつ、です」

「親は」

「え……」

「何をしていたんだ。ピクニックか。そんな軽装で森の奥にまで入り込むとは馬鹿なのか？」

矢継ぎ早に繰り出される質問と叱咤の言葉に、トステイナは普段ゆつくりとしか働かない頭を何とか急いで回した。

「あの、あのえと。わたし村を追放されちゃって」

ありのまま伝える。その言葉を聞いたとたん、男性は眉間の皺を緩め、眉をぴくんと跳ね上げた。驚いた、のだろうか。

一瞬の沈黙。にやあ、と足もとをうろついていた三毛猫が鳴いた。沈黙を割る鳴き声が合図だったかのように、彼は深く長い息を吐く。

「——そうか。君はトステイナ、か」

今度驚くのは自分の番だった。トステイナは小さく首を傾げる。さらりと、長い金系の髪が肩口で揺れた。

「ご存知なんですか？」

「このあたりでは有名だろう」

嫌いな食べ物を無理やり飲み下した時のような顔で、彼は囁いた。

「スレヴィの天災」

「はい」

こくん、と頷く。

スレヴィの天災。それはトステイナを指すもうひとつの名のようなものだった。実のところ、どうしてそう言われるのかは詳しくは知らない。何度か訊ねてはみても、養父は決して口を開こうとしなかった。ただ、物心ついたときから村人にはそう呼ばれていた。

スレヴィの天災と。

トステイナの反応が気に入らなかったのか、男性は渋面のまま黙り込んでしまった。さっきまで煩かった筈のアグロアさえ黙り込んでしまっていて、薄い笑みだけを浮かべて宙に浮いている。

無言の男ふたり。一人の足もとを猫二匹が何度も行き来するが、沈黙は到底それでは埋まらない。居た堪れなくなって、トステイナは手にしていた木杯を寝台脇の飾り机にそっと置いた。コトン、と

音になる。それでも静かなままだったので、トステイナは男性を見上げながらゆつくり口を開いた。

「あのぉ、おにいさんは誰ですか？」

男性が目を瞬く。質問をすることは考えていても、質問されることにまでは気が廻っていなかったらしい。少し頭をかくと、短く告げた。

「俺はミズガルド」

ミズガルド。何処かで聞いたことのある名前だった。唇に指を当てて——思考するときのトステイナの癖だ——記憶を漁る。

そうして引つ張り出した答えに気付いたとき、トステイナはぱつと笑顔を浮かべた。そうだ、知っている！

「知ってます！ おじいちゃんが言っていました！」

「ん？」

「スレヴィの森には、インケンでネクラな天才魔法使い『ミズガルド』が住んでいるって！」

息を呑む程度の時間の、短い沈黙。

次の瞬間には、アグロアの大きな笑い声が響いていた。当のミズガルド本人は、これ以上ないくらい渋面を深くしている。実のところ、トステイナはよく知らなかった。——インケンとネクラ、の意味を。

「あ、あのー！」

だからこそ、記憶から引つ張り出したその情報は、トステイナにとっては明るい光でしかなかった。自分の中から突き上げてくる衝動に身を任せ、彼女は叫んでいた。

「わたしを、弟子にしてください！」

ひんやりとした手が額に触れる。トステイナは思わず目を閉じて、その手の持ち主の声に耳を傾けた。

「ん、大丈夫ね」

涼やかな川のせせらぎのような声。そつと手が離されて、トステイナは目を開けた。

「ありがとうございます」

「いいえ」

小さく微笑んだのは、木の卓をはさんで向かいに座る女性だ。月明かりを集めた絹糸のような短い髪に、冷たい水を模した瞳。白い肌。その彼女を包むのは深紅の長衣で、鮮やかに彼女を惹きたてている。トステイナでさえ、一瞬息を吞んでしまうような美しい人だ。彼女は伸ばしていた手を下ろし、紅茶が注がれた木杯を持ち上げる。

「どうだ、カーラ」

その女性の横で相変わらず渋面のまま腕を組んで立っているのは、対照的に真っ黒なミズガルドだった。カーラとミズガルドの年齢は近いのだろう。大人ふたりの鮮やかなコントラストをきよときよと見比べて、トステイナは一人で納得していた。

今日は風と自称していたアグロアはいなかった。おかげで、この女性が尋ねて来るまではミズガルドとふたりきりで、少々居辛い気配はあったので、トステイナは女性が尋ねてきてくれたことにほっとしていた。

「問題ないわ。少し熱にあてられただけね。発見も処置も早かったのね」

「そうか」

「貴方何かした？」

「特に。煎じたミグの葉を水で与えたのと、後は冷やしたただけだ」
「いい処置ね」

カーラと呼ばれた女性が頷く。ミグの葉、が何かは知らなかったが、何やらありがたいことだけは判った。昨晚も今朝も、ミズガルドは食べやすいスープを作ってくれたので見かけによらずいい人らしい、とトステイナは判断している。

「動けそうか」

「問題ないでしょう。無理は禁物だけどね」

ふと、トステイナは目を丸くした。軽く肩をすくめるカーラの長衣の襟元に、ちいさく輝く紋章を認めたのだ。指先ほどの盾に似た形で黒く、縁取りは金色だ。その中に、七の文字と魔法の杖が絡み合った図が彫られている。

「気になる？」

カーラが気付いたようだった。トステイナは頷いて、小さく囁いた。

「宮廷……魔法師さん」

「宮廷魔法師は職業名だから、さんはいらないわよ。正解。よく知ってるのね」

「おじいちゃんが教えてくれました」

「そう。良かったわね」

微笑まれ、何だか気恥ずかしいような誇らしいような気持ちになつて頷いた。養父のことを良く言われるのは、いつだって嬉しい。

宮廷魔法師——養父が言っていた言葉を思い返す。【国王の為の七人】とも称される、宮廷付の魔法師たちのことだ。

「それにしても」

ふ、と女性が小さく息を吐いた。足もとをまわりつく猫と——それから、部屋のあちこちにいる栗鼠やら鳥やらを見渡す。

「ミズガルド、貴方の拾い癖は知ってたつもりだけどね」

「……悪かったな」

むすつとミズガルドが呻いた。カーラの言いたい事は、トステイナにも何となく判る。実際、昨日一日はあの部屋——想像したとおり客室らしい——に閉じ込められていたので判らなかったのだが、今朝部屋を出てトステイナは驚かざるを得なかった。猫は昨日の二匹どころか七匹もいて、それぞれ好き勝手に動いていたし、その上栗鼠やら鳥やらといった猫にとつてはご馳走になりかねない生き物たちまで、数えるのが億劫になるほどいた。しかもそれぞれ奔放に生きているように見えるのに、争いは起きていないらしい。存外、平和なようではある。ただ、部屋の中で気を抜くと何かを踏みそうな有様ではあった。

「また増えてるんでしょうね、というのはあれよ、覚悟はしていたわ。来る度に何か増えているのはね」

「……」

「けど、普通拾う？ 女の子なんて」

自分のこと、だったらしい。アハ、とトステイナは乾いた笑いを漏らした。ミズガルドが半眼を向けてきているのが判ったのだ。

「目の前で倒れられたら、拾うしかないだろう」

「判らないでもないけど、驚くでしょう。女の子が落ちてたから拾ったなんて。悪い冗談かと思うわよ普通」

（せめて保護とか……言わないかなあ……）

大人ふたりの無遠慮な会話に、トステイナは胸中で呻いたが、当然相手には聞こえないらしい。聞こえたところで改めるとも思えないし、実際拾われたのは確かなので黙っていることにした。

「で、どうするのよこの子。えーと、トステイナ、よね？」

急に話を振られ、トステイナは慌てて頷いた。

「はい。ティナでもいいです」

「ティナね。貴女、どうするの？ ご家族は？」

問いかけに、少し口を噤んだ。昨日は混乱していたせいもあって反射的に答えていたが、どう言えば正しく伝わるのか難しい。思案しながら、ゆっくりと言葉を選ぶ。

「両親とかはもともといなくて……えと、気付いたらいなかったの
で、おじいちゃ……あー、えと村長さんに育ててもらってたんです」
「そう」

「でも、えと、村、昨日で追い出されちゃって」

結局、事実は曲げられずそのまま伝えるしかなかった。沈黙が落ちる。カーラが曖昧な顔で笑っている。

「……何やったの、貴女」

「わかんないです」

「カーラ。スレヴィの天災だ」

見かねたのか、肩に栗鼠を乗つけたミズガルドが口を挟んできた。とたんに、カーラの表情が険しくなる。

「スレヴィの天災。貴女が？」

「はいー。そう呼ばれます。どうしておふたりとも知ってるんですか？」

単純に疑問だった。この歳になるまで、村の外に出たことはほとんどなかった。外での話などそう聞かないが、逆に言えば村の中での呼び名など、外の人間が知っているようなものでもないと思っていた。しかし、カーラは長い睫毛で目元に影を作り「ちよつとね」とだけ呟いた。

「じゃあ、本当に貴女これからどうするの？　というより、どうしようとしていたの」

「あ。えーと、街に行こうと思ってました。スティンブルグならきつとお仕事もあると思って。だから向かおうとしてたんですけど、えと、迷っちゃって」

「なるほどね」

苦笑されて、照れ隠しに笑った。ミズガルドが嘆息するのが聞こえる。

「カーラ。頼めるか」

短い言葉に、カーラが眉根を寄せた。

「街に送り届けろって？」

「頼めるか、と聞いているだけだ。無理なら風をよこす」

「……無理じゃないわ。そういうんじゃない」

静かにカーラが首を振った。

「いいの、それで」

「——ああ」

ミスガルドの首肯。トステイナは慌てて椅子から立ち上がった。自分のことのはずなのに、大人たちが勝手に話を進めていることに驚いたのだ。

「ちょ、ちよつと待ってください！」

「なんだ。君はもともと、そのつもりだったのだろう？」

「そつ、それは昨日までで……だって」

言いたいことが先に頭の中にどんどん溢れていくものだから、言葉が追いついてこない。だ、とか、で、とか、えう、だとか。意味を成さない音を何度も漏らしてから、ようやくトステイナは言いたい言葉を吐き出した。

「わたし、弟子になるといいました！」

「認めてない！」

間髪入れずに返ってくる言葉に、トステイナは反射的にぎゅっと目を閉じた。が、すぐにこじあけ、ミスガルドの深い茶色の目を見つめ上げる。ミスガルドもまた、静かにこちらを見返してくる中で、カーラがけだるげな声を割り込ませてきた。

「ミスガルド、貴方弟子をとるの？」

「とらん」

むすりと、またも否定される。そんなに力いっぱい否定しなくても、と思わず拗ねなくなる。ミスガルドは相変わらず、渋い顔のままだ。

「魔法、覚えたいんです」

訴えるように、トステイナは告げた。

「おじいちゃんが言っていました。誰でも、学びさえすれば魔法は使えるって」

「ええ、そのとおりね」

頷いてくれたのはカーラだった。少しだけほっとして、言葉を続ける。

「村を出て行くのは決まっていたし、おじいちゃんはいろいろ教えてくれました。でも、どうやってお仕事選んで、どうやって生きていくのかはやっぱ難しいと思うんです。おじいちゃんは、魔法だけは教えてくれなかったし」

とくに、村じゃなく街でなんて、どんな場所かも良く判らないのにどうやって生活していけばいいかなんて実感が沸いていなかった。「ちゃんと、あの、学んで何か出来る事があれば、生活していけるとおもって」

「驚いた。意外といろいろ考えているのね、ティナ」

「……わかんないです」

考えているのかいないのかは、自分では良く判らない。だから小さく首を振って、トステイナは軽く息をつく。自分の汚れた靴を見ながら、呻くように言った。

「おじいちゃん、魔法が嫌いみたいでした」

「そう。まあ、嫌う人も少なくないわね」

「でも」

顔を上げる。ずっと、胸の奥にしまっていた疑念を声にする。

「昔おじいちゃんが、一回だけ言ったことがあるんです。……魔法は、いつかお前を助ける術になるかもしれない、って」

カーラが目を細めた。何かを逡巡するように、手のひらで口を覆う。それから、ずっと視線をミスガルドに滑らせた。

ミスガルドはただ、静かに首を振るだけだった。

「——魔法はそんなに良いものでもない」

トステイナは自身の中に渦巻く気持ちを忘れて、思わずミスガルドを正面から見据えていた。

その声に含まれる思いに、何故か、自虐めいたものすら感じたからだった。

「まアったく、あんのひと嫌い何とかなンねえのかねエ」

カーラにつれられてミスガルドの家を出たとたん、トステイナの頭上から降ってきたのはそんな明るい声だった。

「アグロア、いたんですね」

「なーんとなくねイ」

へへっ、と笑うアグロアに、トステイナもほっと笑みを返した。

そのまま、そっと肩越しに出たばかりの家を振り返る。家——というには、少しばかり簡易すぎる気もした。材木を適当に組み合わせただけのようにさえ見える、小さな家。屋根を赤く塗っているのが、最低限の装飾といえるかもしれない。しかし住居というよりは森の管理人の仕事場、とでも言ったほうがしっくりきそうではある。

それが、白い森の中にそっと、人目を憚るように立っている。木漏れ日をつけても、何故か少しもの寂しそうな気配があった。

「まあ、あまり気にしないのよ」

そう言っただけ、と背を叩いてくれたのはカーラだ。こくん、とトステイナは小さく頷いた。考えたところで出ない答えならば、考えるのを一時やめるほうが精神衛生上いいと知っている。

「そうそう、気にしたって仕方ねエかなア」

くる、と空中で器用に一回転したアグロアに、思わずトステイナは笑みが漏らした。

「アグロア、上手です」

「へ？ ああ、これかい？ そらオイラア、風だかな」

風。それはミスガルドも言っていた言葉だ。トステイナは少し首を傾げ、

「風」

と、反復した。カーラが軽く頷く。

「そうよ。風。知らないかしら、民のこと」

「民！」

思わず大きな声を上げる。それなら知っていた。ただ、まさか自分の目で見ることが出来るなどと考えたこともなかったのだ。

「アグロアは風の民なんですか？」

「そうさア」

得意げに鼻を鳴らし、アグロアが首肯する。

民。養父が教えてくれたことのひとつだった。

自然界の四つの元素——火と風と水と大地。それぞれに愛され、祝福された、人であり人ではない種族。それぞれのコミュニティを持ち、それぞれで固まって生活をしていたという。このグレスス王国にも以前は多く存在したらしい。ただし、数年間の戦争で数はぐんと減少したとっていた。

それがまさか、目の前にいるとは。

「すごいですー！」

「すごかアねエさア。オイラ、生まれたときから風だかな」

「そっか、そうですよね」

肩を竦められて、トステイナは小さく笑う。

「アグロアはミズガルドさんと仲良しなんですか？」

「まア、そんなところかなア。あーんま話すと、あの兄ちゃん、機嫌悪くすっからなア」

「ふたりとも、話しながら歩いてもいいけど転ばないのよ」

カーラに注意され、トステイナは慌てて前を向いた。確かに、こんな森の中だ。迷っていたあの日も何度も転んだのは確かで、今日もそうならないためにはきちんと歩くことを意識したほうがいいだろう。

とはいえ。

再度トステイナはそつと肩越しに振り返った。白い葉をつけた木々の中に、埋もれるようにある赤い屋根の家。離れていていた。

なんとなく、胸の奥がしゅんとする。

「ミスガルドさん」

「うん？」

「わたしのこと、助けてくださったのに。わたし、お礼もちゃんと
言えてないです」

「いいのよ。拾うのはあの子の趣味みたいなものだから」

カーラが苦笑した。そのまま「ほら」と前方を指差す。視線をや
ると、木々の向こうに道が見えた。そこに、二頭だての馬車が停ま
っている。

「わ……馬車」

「そうよ。仕事用で悪いけどね。さ、乗って」

促され、馬車に乗り込む。御者が一礼をしてきたので、トステイ
ナはあわあわと頭をぶつけてしまった。カーラが苦笑しながら背中
を押してきて、奥へと進められる。

が、乗ってきたのはカーラだけだった。開いた窓から顔を出すと、
風の少年はふわふわと浮いたままだ。

「アグロアは乗らないんですか？」

「オイラかい？　んー、カーラ。ステインブルグ行きかい？」

「当然でしょ」

「んーじゃ、乗らねエやア」

ぽんっ、と跳ねるように馬車から飛び退り、空中でアグロアが笑
う。

「どうしてですか？」

「そーりやア、お嬢、風が街に行くときは、ぐーんっと上のほうを
吹いていくか、超突風で吹き抜けるかしねエとだかなア」

「どうして？」

アグロアが困ったように顔をゆがめた。

「お嬢はあんま知らねエのかなア。人の集まってるところにオイラ
たちみたいな民がいくと、風を捕まえようとするバカがいのさア」
言っなり、ばーかばーか、とはしゃぐように繰り返しながら、ア

グロアがぐんつと空高く舞い上がった。白い葉がざざつと音を立てて何枚か降って来る。

そしてすぐに風は見えなくなった。

「風は気まぐれだからね」

ふつと短くカーラが息を吐いた。呆然としているうちに、カーラは御者に声をかけ、馬車はゆっくりと動き出す。がたがた、とお尻の下が揺れる感覚に、トステイナはどうしていいか判らず何度か立つとうとしては転びかける。

「じつとしていなさい」

「だって、が、たがた、し、ますっ、し」

「これでもいい馬車なのよ。慣れてない？」

「はじめ、つてれ……っ！」

噛んだ。

思わず口を押さえてへたへたと座り込んだ。カーラの冷たい視線を感じる。

「おばか」

「……はい」

涙目になりながら頷いた。今度はおとなしく座りながら、振動に耐えることにした。そつと、窓の外に目をやる。

季節は短くもあかるい夏。けれど、窓の外から見えるスレヴィの森の景色は、まるで雪でもかぶっているかのように白く生氣がない。数年前までは。

ふと、養父の言葉を思い出す。

数年前までは、どこもこんなものではなかったのだがな、と養父は良く口にした。トステイナは知らない。森の死化がはじまったのは十年ほど前だという。トステイナにとってそれ以前の記憶はなく、物事を意識するようになってから先、見続けていたのは白い森だ。死化の本当の原因は知られていない。一般的に言われているのが、地の民の死だ。

風の民と同じように、地に愛され地に属したとされる地の民は、

先の戦争で民のすべてが絶えたと言われている。スレヴィの森の死化はその頃始まったというのだ。

実際のところは誰にも判らないのだろう。判らないまま死化という病は森を覆いつくし、今では国の至る所で死化する木々が見られるという。

トステイナにとっては、難しくてよく判らないことだった。ただ判るのは、死化する森がなんとなく寂しそうで、哀しそうだということぐらいだ。

似ているな、と感じた。

結局のところ、理由はどうあれ死化した森はもとの緑には戻らないのだろう。それは、理由も良く判らないまま村を追い出された自分と似ている気がした。理由はどうあれ、結局自分はある村へは帰れない。

十五になれば、村を追い出される。

それは昔から養父に教わっていたので、いまさら誰を恨むわけでもない。ただ、なんとなく、寂しい。

この感覚は森に良く似ていると思う。どことなく寂しい、陽光の中の白い森。

「テイナ？」

カーラの呼びかけに、少しだけ微笑んでみせる。

「はい」

「街まで少しだけど、訊いていいかしら」

「なんですか？」

「魔法、学びたいの？」

問いかけに、静かに頷く。

「わたし、出来ることってほとんどないです。簡単な計算とか、読み書きとかはおじいちゃんが教えてくれましたけど、特技って言うのはなくて」

「ええ」

揺れる馬車の中では、言葉はどうしても途切れがちになる。それ

でも、トステイナはカーラをまっすぐ見据えたまま、ゆっくり言葉を紡いだ。

「難しいことは良く判らないです。でも、これから一人で生きていくしかないならなおさら、何か、ちゃんとこれが出来ますって言えるのが欲しくて」

「それで魔法」

「目の前に、おじいちゃんの言ってた天才さんがいたから。それに、おじいちゃんの言葉もちよつと気になってて……学んで、私が魔法を知れば、おじいちゃんの言葉もいつか判るかもしれない」

カーラが曖昧に微笑む。

「実際、面倒よ、魔法って。取得したところで就職先なんて、魔法師団か薬屋か、そんなところがほとんどでしょうし。宮廷魔法師はなかなかなるものでもないし。何より、いまだき体系立てていないのもどうかと思うけど、弟子をとってくれる師を探すところからはじめなきゃいけないし」

そういう本人は、宮廷魔法師の襟章を身につけているのだから皮肉めいても聞こえた。

宮廷魔法師。通称【国王の為の七人】とも呼ばれる宮廷就きの魔法師たちだ。その名のとおり七人構成で、ほぼ王直属といっていいほどに王に近い場所にいるものたちだ。

通常は騎士団と同じ位置にいる魔法師団から、成績の良い者が選ばれるというが、まれに直接宮廷魔法師になる者もいると聞く。

「あの、カーラさんはどうして宮廷魔法師になったんですか？ 魔法師団から？」

「あたし？ そうよ。叩き上げ。まあ、実際あたしも貴女と似たような理由で魔法に手を染めて、ずるずるとね」

苦笑するように、カーラ。

詳しく訊く気はトステイナにはなかったが、似た理由と言うからにはカーラもいろいろあったのだらうと想像はつく。

「ちなみに、ミズガルドはその頃のあたしの上官みたいなものね」

「えっ？」

「あの子はエリートだから、直接宮廷魔法師になった人間だったけど、ちよくちよく魔法師団に顔は出してたから。その頃に何となく仲良くなって、今に至るってワケ」

トステイナは思わず感嘆の息を漏らしていた。天才、の意味が何となく理解できる。

「ミズガルドさんもすごかったんですね」

カーラが、どこことなく誇らしげに微笑んだ。

動物だらけの、しかし人気のない部屋の中にふいに一陣、風が吹いた。

「いいのかイ？ お嬢たち行っちゃったぜイ？」

頭上で停滞した風が、無遠慮に投げってくる言葉にミスガルドは嘆息した。

「うるさい風だ」

「ひゃっひゃ。ならもつとビュンビュン吹いてやろうかい？」

「やめろうるさい」

見上げて睨むと、白髪の風の少年はにやりと笑った。

「オイラア、アンタがここに住み始めた理由知ってるぜ」

風はこういった情報には聡い。言葉は風に乗るから当然だった。

普段は、たいして気にも留めていない。しかし、今日に限ってはわずらわしさを覚えた。

もちろん、風はこちらの事情など汲みはしない。

「スレヴィの天災の噂を、確かめるためだ。だろ？」

否定する気はなかった。ただ、手にしていた栗鼠の餌を床にまいた。ちいさな栗鼠たちが走りよってきて、食べ始めるのを無表情に見下ろす。風はまだ、頭上にある。

「偶然にしろ拾ったんだ。あんのまま置いときゃア良かったのに、アンタ、判んねエなア」

「俺が」

思わず声が出た。一瞬口を噤んで、しかし吐き出すようにミスガルドはそのまま続ける。

「俺がそんなことをしたところで意味がない」

「意味ねイ」

「……街なら、カーラの目がある。悪いようにはならんだろっ」

「どっちにしる心配性なんだアなア、ミズガルドは」

「けっ、と笑われて、ミズガルドはまたも小さく息を吐く。ふ、と風が動いた。見上げると、天井近くにまで昇っている。

「けどさ、ミズガルド」

「なんだ」

「街には、おっかねエアイツもいるんだぜイ？」

「誰の事を指しているのか。」

「ミズガルドには容易に知れた。だからこそ、目を細める。」

「【国王の為の七人】は、一般の人間には手を出すまい」

「だといいいけんどなア」

「ふわっと、風が揺れた。そのまま、一瞬にして姿が消える。気まぐれな風だ。いつも思うが、しかし何故かなつかれているのも理解していた。あれはあれで、自分のことも心配してくれてはいるのだろっ。そして昨日拾ったあの少女——スレヴィの天災のことも。」

「風のいなくなった部屋を見渡し、ミズガルドはまたひとつ、息を零した。」

「部屋は何故か、寒々しさすら纏っている。」

華々しさと賑やかさと喧騒とが交じり合う雑多な雰囲気呑まれて、トステイナは目を大きく見開いたままその場に棒立ちになっていた。

グレシス王国の首都スティンブルグ。国土の西北に位置し、アーゼス海に接する街だ。面積自体は国内のほかの街に比べても小さいほうではある。それでも、首都らしい華やかさと賑やかさは他に敵うものはない。

石造りの街門を抜け、通りをまっすぐ進むとすぐ、開けた広場に出る。【カロリアの願い】と名付けられたその広場の中心に、大きな噴水がある。噴水の真ん中には少女――カロリアの祈りを捧げる像が陽に照らされて輝いていた。そして広場には、露天商が立ち並び、そこからさまざまな通りへ道が放射線状に伸びている。

その広場の中心で、行きかう人々の中で、カロリアさながらに固まったまま、トステイナは街を見渡している。

「……ま、驚くのは無理ないけど。ちょっと邪魔かしらね。トステイナ」

カーラは微苦笑し、トステイナの腕を引いた。はっ、と呪縛から解かれたかのように、トステイナがわたたと辺りを見渡し、噴水に寄る。はぁ、と息を吐いた彼女の頬がわずかに色付いているのを見て、またカーラはひとつ微苦笑をこぼす。

「圧倒されてる？」

「はいー、人がいっぱいです！」

きらきらとした目で大きく頷く姿は、聞いた十五という年齢よりずいぶん幼く見える。低い背も、凹凸の少ない華奢な体つきも、腰

まで伸びるさらさらとした細い金の髪や大きく丸い緑玉の瞳も、仕草に輪をかけて幼く見せている要因に思えた。

けれど、とカーラは胸中で呟く。

彼女はスレヴィの天災だ。スレヴィの天災が、この歳まで生きてきたとするならば、ただ見た目通りの幼さだけですむはずはない。そう思える。

「ティナ、貴女お菓子は食べれる？」

「んつと、ちゃんとしたお店のは食べたことないですー」

「じゃ、食べてみる？　少し先に美味しいお菓子を出す店があるわ。奢るわよ」

「えっ、そそそんな、悪いですっ！　わたしちよつとならお金持ってますっ」

と、トステイナが持っていた麻布の袋を掲げる。本当に「ちよつと」なのだろうと思いたくなるほど、些細な大きさの袋だった。見る限り、彼女はそれしかもっていない。財布もその中なのだろうか、とカーラは思わず顔をしかめた。

「財布は身につけておきなさいね。村じゃそうでもないかもしれないけれど、こういう大きな街は何かと物騒だから」

「あ。そうでした！」

トステイナが慌てた様子で袋から財布を取り出した。紐のついたただの小袋だ。小額しか入っていないのは外からでも見て取れる。それを首から提げ、身に着けている麻の繋ぎ服の下にしまう。そして満足そうに頷いた。

「大丈夫ですっ！」

「……まあ、それもずいぶん危なっかしい行動なんだけどね」

「え……そうですか？」

「人前で財布なんて出さないのよ。あたしがいるから平気でしょうけどね」

肩をすくめ、そつと肩章を指差した。トステイナがこく、と短く頷く。【国王の為の七人】の連れに手を出す人間はさすがにいない

だろう。自警団や治安警察どころか、宮廷審理会よりも立場としては上だ。【国王の為の七人】に手を出すのは、そのまま反逆罪ととられても仕方ない。

この赤い長衣は肩章とともに自らの身を示すものだ。長衣は外套なので正式な場で身につけるものでもないが、逆に言えば街中ではその姿のほう知られている。実際、今もトステイナとカーラの周りは雑多な人の流れが少しばかり遠巻きになっていた。

「行きましょう」

ほんと、細い肩を叩いて歩を進める。ぱたぱたとどこことなく危なっかしい動きでトステイナが横に並んできた。ほんのわずか、人の流れが変わる。

「そうそう。さっきの続き」

「はいー？」

「奢らせなさい。少しはいい仕事していて、お金もそこそこ持つているし、そもそもあたしは貴女より十も年上なんだから」

ね、と軽く片目をつぶってみせる。彼女は戸惑ったように表情を二転、三転させたあと、ややあってから困ったように微笑んだ。

「ありがとうございます」

「奢ってから言って貰わないとね」

小さく笑い返す。素直な子だ。噂通り、彼女がスレヴィの天災ならば、なおのこと彼女をこうまつすぐに育て上げた養父というのは、なかなかの手腕だといわざるを得ない。

石畳の道をゆっくりと歩いていく。【カロリアの願い】からまっすぐ北に伸びるこの中央大通りは、特に人の流れが多い。視線を上げれば夏の青空を背景に、細い尖塔が組み合わさった城が見える。中央大通りは城の反対側にも続いていて、この町の主要な通りだ。城からは東西南北に通りが延びていて、その通りにはそれぞれ【カロリアの願い】と同じく主要広場が設けられている。広場からはさらに道が延びていて、街全体は城を中心とした放射状に構成されている。街の中心部には石造りの家が多く、外に近づくほど新しい煉

瓦造りの家が目立つ。石畳の道も通りごとに模様が敷かれていて華やかな街並みだ。とはいえそれは陽の部分ではある。

ふと、カーラは隣を歩いているトステイナが、視線を横に向けているのに気付いた。

「テイナ」

小声で、注意する。トステイナはまた短く頷いて、正面をみた。浮かない顔だ。

大通りから少しでもずれれば、そこには街特有の陰がある。

路地には、見るからに粗暴な子供たちが屯していた。トステイナが小さく呟く。

「ご家族の方、お困りじゃないのでしょうか」

「さあね。孤児の可能性もあるし」

トステイナが目を伏せる。

「この街には孤児院もいくつかあるけれど、まあ、合わない子も多いでしょうし、入れるかどうかも判らないしね。親がいても、子供に興味がないってこともあるし」

「……そう、ですね」

沈んだ声に、カーラは思わず苦笑した。

「テイナ。貴女もご両親はいないんじゃないの？」

「そ、そうなんですけど。でもわたしにはおじいちゃんがいまして」
また、養父だ。よほど好きだったのだろう。追い出されてなお、この物言いが出来るのは。

カーラは細く長く息を吐いた。自身の短い銀髪を指で弄んでから、軽く告げる。

「戦争孤児なんて、あたしから貴女ぐらいの世代だと、珍しくもなるともないのよね。嫌な世の中だけど」

戦争。今の時代でその言葉が指すのは、九年前に休戦したままの民大戦のことだ。休戦からまだ十年も経っていない。戦が始まったのはカーラがまだ幼い頃だったが、トステイナにとっては生まれる前の話だろう。だからこそ、傷跡はまだ濃い。このステインブルグ

にしても、外に行くほど新しい家が多いのは幾度か戦火で失われた過去があるからだ。

「わたし」

トステイナがぼつりと呟く。

「戦争のこと、よく知らないんです。物心つく頃には終わってたみたいで。ただ、なんとなく嫌だなんて思うだけなんです」

「それでいいのよ。今生きてる貴女ぐらいの歳の子が、そう思ってくれるのがたぶん一番大切なのよ」

カーラよりずっと年上の世代には、知らないことを恥としたり蔑んだりする人間もいる。だがカーラは、知らないならそれでいいと思っていた。いい思い出でないものを下の世代にまで押し付けてどうなるものでもないだろう。

視界の端で、先ほどの子供たちが動くのが見えた。カーラは半歩、歩みを遅らせて完全にトステイナと横並びになった。トステイナが目を瞬かせるが、カーラは気付かないふりをする。男が三人。年齢的にはトステイナと変わらないだろう。彼らが視界から消える。後ろへ行った。大丈夫そうだ。ほっと胸をなでおろした瞬間、背後で悲鳴が上がった。

「わっ、なに……」

トステイナが驚いた声を上げて振り返る。咄嗟にトステイナの腕を掴みながらカーラも振り返った。まっすぐに伸びる道。転んだのか、道に座り込んでいる老婆。遠巻きに見ている通行人。走り去っていく先ほどの少年たちの背中。一瞬でカーラは状況を把握した。

物盗りだ。

悲鳴を上げたのは通行人の誰だろう。盗られた張本人と見られる老婆は小さく震えたまま、事態を理解出来ないでいるのか呆然と座り込んでいる。

「面倒な」

小さく舌打ちし、カーラは駆け出した。実際のところ、街の治安に関しては宮廷魔法師の出る幕ではない。自警団か、あるいは治安警察の仕事だ。しかしこう目の前でやられてしまつては、義務ではないとはいえ宮廷仕えとして見過ごすわけにもいかない。まずは老婆の下へ駆け寄る。トステイナもついてきた。

「お怪我は」

「あ、ああ。宮廷魔法師さま……いえ、怪我はありませんが、鞆が

……」

呆然と答える老婆の肩に手をかけた瞬間、ふっと小さく風が流れた。顔を上げる。一瞬、血の気が引くのが判った。トステイナが、あの少年たちに向かって駆け出していた。

「——ティナ、待ちなさい！」

何が起きたのか。正直、トステイナは理解していたとは言えない。ただ、カーラの険しい表情と周りの空気、掛けていく背中を見て追いかねければ、と身体が勝手に動いていただけだ。

見た目はトロいと言われたが、足は村の中でも一番速かった。すぐに、前に行く少年たちの背中が迫ってくる。三人。前にふたり、少し遅れてひとり。そして、その頃になってようやく、トステイナは先頭の少年が似つかわしくない鞆を持っているのに気付いた。

「そ、それ、盗ったんですか！？」

「は！？」

怪訝な顔で、少年の一人が振り返ってきた。事実だ、と何となく理解した。理解した瞬間、トステイナはかつと頭に血が上るのが判った。

「——返してください！」

叫んだ。同時に、手近にいた一番近い背の低い少年へ飛び掛る。どつ、とトステイナは少年と一緒にもんどりうって地面に倒れた。

「な、にすんだよこのアマ！」

「たっ、倒れました！」

「そうじゃねえよ！」

怒鳴られる。トステイナは少年にしがみつきながら何とか顔を上げた。ただただ背中を見て走ってきたせいでよく判らなかったが、いつの間にか知らない道に出ていたらしい。石畳の道から、ちいさな水路を渡る橋の近くまで来ているようだ。遠巻きに、人が見てい

る。

「何で盗るんですか？ 返してあげてください！」

「バカかてめえ、殴りたいのか」

「ヤです！」

断言する。同時に、トステイナは乱暴に振り払われて身を崩した。腕の間をすり抜けて、少年がまた駆けて行く。気付くと、先を走っていた後二人はもう見えなくなっていた。今、この少年を見失えば追いつくことはもう出来ない。石畳で擦った手のひらを気にも留めず、トステイナは無理やり立ち上がった。もう一度走り出し、何とか追いつがろうと手を伸ばす。

「待つ……」

「邪魔なんだよ！」

強く胸を押された。それはすぐに判った。自分の足がもつれて、何かにひどく腰をぶつけたというのも判った。ただ、そこから先がトステイナには良く判らなかった。急に、身体が軽くなったのだ。

（え？）

思考がまとまらないまま、視界はくるりと回った。自身の金色の髪が、視界の中で大きく揺れる。少年の顔が離れて見えて、そこで理解った。橋だ。橋から、落ちている。

下は水路だったはずだが、その脇にはきつと地面もある。落ちたら痛いだろうか。冷たいのだろうか。

（夏だから大丈夫かなあ）

そんなとりとめのない思考が一瞬のうちに浮かんでは消えていき、そして、視界の中で少年が走り出すのが見えた。トステイナは思わず、心の中で叫んでいた。

（——行っちゃ、ダメ！）

カーラはその光景を目にして、こくりと一度喉を乗らした。短い前髪をそつと上にかきあげてから、橋の脇にあるちいさな階段から水路へと降りていく。

「ティナ！」

「あ……カーラさん」

水路の脇。ささやかな土手になっている場所で、緑の絨毯の上にトステイナは仰向けになっていた。よろよろと身を起こす彼女の背に手を回す。

「怪我は！」

「わたしは大丈夫です。あの、さっきの男の子たち！」

カーラの腕に、きゅっとトステイナの爪が食い込んだ。すぎるように、こちらを見上げてくる緑玉の瞳。

「追いかけて、つかまえて」

「でも、貴女怪我」

「してないです、大丈夫。だから、お願い、カーラさん！」

真摯に想いだけをぶつけられて、カーラははっと短く早く息を吐いた。立ち上がる。

「判ったわ。宮廷魔法師の名にかけて」

小さく囁く。そして、カーラは意識の中で理を展開する。魔法式と呼ばれる手順。世界の理を、ひとときだけ自分の理想とする理と同期させる術。

それこそが——魔法だ。

「——跳べ」

一言。同時にカーラは地面を強く蹴った。空気が耳元でなり、視界の中の景色が一瞬にして変わる。階段も使わず、もとの道に戻る。

地面。触れた。また、蹴る。

（――あれは）

二度目。すぐだった。空中から見下ろした景色の中に異質なものを見つけ、カーラは眉根を寄せた。地面に降り立つと同時に理を解除し、異質な光景へと走り寄る。

そして、カーラは息を呑んだ。

少年たちが三人。いずれも先ほどの彼らだ。鞆もある。それは間違いはなかった。だが、目の前の光景に、いまいち理解が及ばなかった。

通りの脇にある一本の大木。その根が絡んだかのように揃って地面に転んでいたのだ。それぞれがそれぞれ、抜け出そうともがいている。

カーラは水色の目を細め、そつと口を手で覆った。

（これ……は）

険しい顔をしたカーラが鞆を手に戻ってきて、少年たちも治安警察に引つ張っていかれ、これでようやく息が吐けるかと思ったのもつかの間、トスティナはそのままカーラに腕を引かれて早足で道を進んでいた。

「カ、カーラさん？」

最初のうちはこちらに怪我がないか心配してくれてゆつくりと進んでくれたのだが、怪我が一切――擦り傷や打撲ほど――ないのが確かだと判ると、カーラの歩みは早くなった。橋をいくつか渡り、通りを何度も曲がり、やがてお洒落な煉瓦造りの建物の前へと出る。大きさはそれほどでもない。診療所、の看板がかかっていたが、その言葉から受ける冷たい印象は欠片もない、あたたかな雰囲気 of 建物だった。それは診療所の周りに植えられている花々が、どれもしきんと手入れされているように見えるからだだろうか。

その診療所の扉を、カーラは無造作に開けた。

「ネロ、いる？」

「あ、いらっしやい、カーラさん。奥ですよ。今はお暇なので大丈夫」

「ありがとう」

受付台から向けられた女性の笑顔に、トステイナがきよときよとした。しかしカーラはまたトステイナの腕を掴んで奥の扉へと進んでいく。深い緑色の落ち着いた扉。診察室、と札が掛かっていたが、こちらもカーラは合図すらせず無遠慮に開けた。

「ネロ！」

「毎回毎回少しくらい合図してくれただっていいでしょうに」

呻くような言葉とともに、その部屋の中、椅子に座っていた男性が苦笑した。トステイナは状況を理解出来ないまま部屋に入り、果然とその男性を見上げた。

背が高く、細身の男性だ。整った洋装の上から、白衣を羽織っている。眼鏡、というものだったか、丸い硝子の装飾品を顔につけていた。柔らかそうなふわふわとした茶色の髪が、この建物に良く似合っているようにトステイナには思えた。

男性はカーラから視線を外し、こちらに目を止めた。眼鏡の奥の細い目が、少しだけ丸くなる。

「カーラ、この子は？」

「スレヴィの天災」

短い言葉。だが、それだけで男性の表情が険しくなった。

「この子が……？」

「そうよ。——ああ、ティナごめんなさい。その辺座って」

「え？ えと」

唐突にこちらに話を振られ、トステイナは慌てて辺りを見渡した。近くに簡素な椅子があるのを見つけ、おずおずとそこに腰を下ろす。

「し、失礼します」

「はい、どうぞ。すいません、色々唐突でしょう」

苦笑して、男性が言った。少しだけほっとして、トステイナも微笑を返す。

「僕はネ口。カーラの幼なじみです。お名前を伺っても？」

「ト、トステイナです。ティナでもいいです」

「そうですね。よろしく、ティナ」

彼もまた愛称で呼んでくれた。そのことが何だか嬉しくて、トステイナはにこっと笑みを浮かべる。

「ネ口、今時間はある？」

壁にもたれかかったカーラが訊く。

「予約は入ってません。それで、どういう経緯で？」

「村を追放されたらしいわね。で、死の森で迷って、偶然あの森の引きこもりが拾ったみたい」

森の引きこもり。

それがミズガルドを指すのだと理解して、トステイナは小さく苦笑する。それはネ口も同じだったようで、曖昧に笑みを浮かべていた。

「相変わらずの拾い癖ですね。それで、カーラ？ それだけじゃないんでしょ？」

「ええ。さつきちよつと、そこで物盗りにあつてね」

「無事でしたか」

「やられたのはこの子じゃなくて、巻き込まれた、というより首を突っ込んだ感じなんだけどね」

少々呆れられているのが声の調子から判ったので、トステイナは少し視線を外した。ふ、と短いため息が降って来る。

「正義感が強いのは良い事なんだけど、やっちゃダメよ、本当は。あんなこと」

「はあ」

今度また同じような状況になった場合やらないか、と問われれば、やるとしか答えられなかったので、トステイナは曖昧に返事をした。その事を理解したのか、カーラはまた短く嘆息する。

「この子はちなみに橋から落ちたわ」

「え。診ましようか」

「怪我はないみたい。よね？」

「はい。痛いところとかないですー。地面、ふわふわでした。草のおかげみたいです」

ネロが怪訝な顔をした。そつと、カーラを見上げる。カーラは肩をすくめて、こちらに一度視線を向けた。それから、壁から背を離し、ゆっくりネロに近づく。座ったままのネロへと腰をかがめて、何かを耳打ちした。

こういうとき。

大人たちがトステイナの前で何かをこちらに聞こえないようにはなしているとき。自分は口出ししないほうがいいとトステイナはよく知っていた。多くは自分に対してのことで、そしてほとんどがあまり良くないことだと判っていた。

案の定、ネロの表情から穏やかな雰囲気が一瞬消えた。困ったように眉根を寄せ、トステイナを見て来る。視線が合うと、一瞬瞳が揺れた気がした。ネロはそのまま、ゆっくり視線をカーラに戻す。

「——どう思う？」

カーラの言葉に、ネロは短く頷いた。

「噂どおり、ということでしょうね」

「あ、の」

関わるべきではない。口を出すべきではない。そんなことは判っていた。頭では理解していた。けれど、到底納得できるものでもなかった。

椅子から立ち上がり、トステイナは一步前へ出た。

「教えてください。スレヴィの天災、って。ネロさんも知ってらっしゃるんですか？ 皆知ってるものなんですか？ わたしのこと、なんですよね？」

「……ええ。知ってます」

「ネロ」

カーラの囁きが、ネロを諷める言葉だとは判った。だが、ネロは軽く肩をすくめただけだった。

「ただ僕が知っているのは、カーラやミズガルドと仲良しだから、ですね。カーラとミズガルドは仕事柄……まあ、ミズガルドは昔の仕事柄、ですけど。そんなところですし、皆が皆知っている、というわけではありません」

微笑まれ、ほんの少しだけ胸のつかえが取れた気がした。それでも、まだ疑問はあった。

「あの。何なんですか？ スレヴィの天災って。噂ってなんですか？」

何度も。養父にも尋ねた言葉だった。けれど、返ってきたのもまた、養父と同じ言葉だった。

「噂は、あくまで噂です、ティナ」

「でも」

「すみません。僕にはそれ以上今は言えません。時が来ればいずれお話しする機会もあるでしょう」

微笑は、問いかけに対する明確な拒絶に思えた。答えられない、という拒絶だ。視線を落とし、トスティナは自らのつま先を見つめた。

「……ティナ、ごめんなさいね」

カーラの声に、ゆるく左右に首を振る。

「それで、カーラ」

ネロが声を上げた。

「どうするつもりで？」

「そうね。どうしたほうがいいかしらね。話を聞く限り一応四則演算も読み書きも出来るみたいだし、簡単な仕事くらいなら探せるでしょうね。住むところなら、わたしが借りてもいいわ。もともと、その手配はするつもりだったの」

そこまで面倒を見てくれるつもりだったのか、とトスティナは目を丸くして顔を上げた。

気になることは答えてくれない。けれど、カーラはこちらを、とても気にしてくれていたのだと改めて判る。

ネロは難しい顔で首を傾げ、

「いえ」

と短く囁いた。

「やめたほうがいいでしょう。この街にいるのは得策ではありませんせ

ん」

「……よね、やっぱり」

「制御は？」

「さっぱりでしょうね」

また、判らない会話だ。それでも、トステイナは口を挟めなかった。ふたりが真剣にこちらを心配してくれているのは、声の響きから判ったからだ。

「ミズガルドは」

「わがまま坊ちゃんに頼まれて、あたしはこの子を街に連れて来たのよ」

はあ、とネロが大きく息を吐いた。

「相変わらず面倒くさい思考回路してますね、あの人」

「ミズガルドなんだから仕方ないわ」

（酷い言われようだなあ……）

トステイナはこっそり胸中で呟く。ネロがゆっくり立ち上がって、窓を開け放した。子供の喧騒と一陣の風が吹き込んでくる。

「彼のもとにいるほうがいいでしょう。制御も学べる。森は街でも村でもない。この際ミズガルドの面倒くさい思考回路は無視しましょう」

「それが一番よね、やっぱり。あーあ。あたし何してるのかしら。振り回されて行ったり来たり」

「僕に会いに来たんでしょう」

「だまらっしゃい」

ネロの軽口を切り捨て、カーラはトステイナに向き直った。

「ティナ、ごめんなさいね。勝手に色々話しちゃって」

「……いえ」

「せっかくここまで来て貰って申し訳ないんだけど。森に戻りましょう」

手を差し伸べられ、トステイナは目を瞬かせた。

「え？」

「勝手にごめんなさいね。ミズガルドの弟子になつてくれる？ 貴女にとつて、それが一番いいことだとあたしたちは判断したの。…理由は、今はまだ少し、どう話せばいいのか考えさせて」

カーラの申し出に、トステイナは混乱したまま動けなくなっていた。

「弟子……？ ミズガルドさんの？」

「ええ。魔法の弟子。あの子には、あたしから話すから」
嬉しい、はずだった。

確かに魔法は学びたかった。それが、養父の言っていた『天才』に学べるのなら言うことはない。実際、自分から一度志願したのだから。

けれど、どうしても胸の奥に何かもやもやしたものが巣くっていた。

魔法はそんなに良いものでもない。そう告げたときのミズガルドの表情を思い返す。そしてなにより、この事態を大人たちが勝手に決めたということ。それらが、ちいさな雨雲の切れ端みたいに、胸の奥で漂っている。

それでも、自分はひとりで生きていくには弱すぎた。資金も微々たる物だし、生きていくための能力もない。ここで大人たちの言葉を跳ね除けることも出来なくはないだろうが、あまりに心もとなかった。

そして何より、カーラとネロが真剣に自分のことを考えてくれているのは確かだった。それだけは理解出来た。だからこそ、その彼女らの考えを無碍に一蹴することは、トステイナには出来なかった。

「——はい。お願いします、カーラさん」

カーラに手を引かれ、街を出て、また、来た道に戻っていく。華やかな景色は遠ざかり、白い、どこか寂しげな森が視界を覆う。馬

車を降り、日が傾き始めた森の中を早足で進んでいく。

小さな、赤い屋根の家。

カーラが扉を開けると、栗鼠たちが飛び出してきた。少し遅れてから顔を出したミスガルドがトステイナを見付け、目を見開く。

「カーラ、どういう」

「スレヴィの天災は本物よ。制御を学ぶ必要がある。それがあたしとネロの見解。ここに連れて来た理由が判るわね？」

短い言葉に、ミスガルドの表情が一変した。強張った顔で、何かに怯えるような――そんな瞳でトステイナを見据える。

胸の奥が、キシ、と小さく音を立てた気がした。

張り付いた唇を何とか引き剥がし、トステイナはミスガルドの揺れる瞳を見上げた。

「あの」

服の胸元を握り締め、トステイナは言った。二度目の、言葉を。

「わたしを、弟子にしてください」

少年は走っていた。

疲労が確実に溜まっていく足は重くなる一方で、前へ進んでいる確証すら持てなくなる。もつれ、何度となく転びかけながら、それでもただ走っていた。

悲鳴が背後から、まるで追いつがるように聞こえてきて、それが怖くて、それから逃げるように、彼は走っていた。

時折、思い出したかのように地面が突き上げられた。踏み出す足の先、夏草がぬるりと溶けているかのような感触を伝えてくる。地面が突き上げられ、あるいは横に揺さぶられ、その度に地面に手を付き身を屈めて何とか耐えた。幾度か。数えることも出来なくなつた頃、林を抜けた。

——ミズガルド！

聞きなれた声。顔を上げた。見慣れた顔がそこにあり、彼は安堵の息を吐いた。駆け寄る。

——無事だったか。

見慣れた顔の少年が、強張った顔でこちらを見つめてくる。その表情がふいにぐにやりと闇に溶けたバターのようになだ。それはすぐに消え、先ほどより幾分大人びた、けれどまごうことなき同じ少年の顔がそこに浮かぶ。しかし、その表情は強張りはしておらず、多分に嘲りを含んでいた。

そして、彼は気付いた。

（夢だ）

いつもの、夢だ。理解する。そうであれば、この先もいつもおりの展開だろう。考えるまでもなく、夢はいつもどおり進んでいく。嘲りを浮かべたその人物は、伸ばしたこちらの手を無造作に払いのける。

——哀れだな、ミズガルド。

——五月蠅い。

——もういない。誰もいない。父も母もいない。誰が殺した、誰のせいで死んだ、何故そこから逃げる、過去から逃げる、逃げて何になる哀れな自分を自分で慰めるだけの時を歩むのを選ぶか——
堰を切ったように溢れ出す、呪詛のような言葉。強固な蔦のように自らを絡め縛り、動けなくしてきた声。払いのけたくても、逃れられない。だから彼はいつも夢の中で、悲鳴を上げる。

——やめろ！

「——せんせい！」

覚醒は急速だった。闇の中に、金色の光が割り込んでくる。それが、覗き込んでいる少女の長い髪だと理解して、ミズガルドは腹腔から短く息を吐き出した。寝汗がひやりと首筋を冷やす。

「先生、大丈夫ですか？」

先生。

呼ばれない言葉に思わず軽く身じろぎした。見下ろしてくる少女は、宝石のような緑玉の瞳を、不安げに揺らめかせている。一繋ぎの服は、年頃の少女にしてはレースやフリルといった飾り気もなく、ただただ麻の味気のないものだ。純朴な少女は、無言のまま見上げるこちらに不安を抱いたのか、もう一度「先生？」と呼びかけてきた。

「入ってきたのか。鍵は閉めていたはずだが」

「え、あ。ごめんなさい！ ああ」

「どうやって入った？」

「あ……アグロアが開けてくれました」

「へっへえ、可愛いお嬢の頼みごとは、オイラ断れねえんだなア」

声の方向に首を向けると、いつもの白髪が、いつもの調子で浮かんでいた。舌打ちし、身を起こす。

「ただだ、大丈夫ですか」

「何がだ。君は落ち着きがないな」

「だ、だって、うなされてました」

そう言われ、ミスガルドは眉を顰めた。

「うなされていた。俺がか」

「です」

こくん、と無造作に頷かれ、ミスガルドは髪を掻き揚げた。声に出ていたということなのだろう。それを心配して入ってきたというのなら、咎めようがない。

「判った。悪かった。何でもない」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。……出て行ってくれないか。着替えたい」

告げると、少女ははっと顔を強張らせる。頬を紅潮させながら、一度ぺこんとお辞儀をして慌てた様子でアグロアと共に出て行った。見送って、ようやく安堵する。

寝台から抜け出し、板張りの床へと裸足のまま降り立つ。窓辺で、いやあ、と声がした。若干立て付けの悪い窓を開けると、張り出た一階の屋根に黒猫がいた。最近よくやって来る一匹だ。白い森と降り注ぐ朝日の中で、際立って艶やかな黒い毛並みに目を細める。

「おはよう」

にや、と短く鳴いて、猫が部屋に入ってきた。そのまま、ミスガルドは衣装を着替える。寝間着を脱ぎ、いつもの長衣に袖を通す。黒く重い雰囲気の長衣は、いいかげんやめたら？ と何度かカーラに言われている。が、不自由もないのでこのままだった。

鏡代わりに、窓に自分の姿を映す。眠そうな、不機嫌そうな男の顔だった。襟元にあの頃のような印章は見当たらない。あれは、自分が引いた後の空席を埋めた、カーラの襟で今は光っている。

宮廷魔法師ミスガルド。かつては、そう呼ばれた。もうずいぶん昔のことだ。歴代最年少で宮廷魔法師に選ばれ、一時期は騒がれもした。しかし、過去のことではない。

自問する。

あの印章すら手放し、時折舞い込む薬の仕事程度で生計を立てている自分に、いまさら魔法使いを名乗る資格はあるのか。あまつさえ、弟子をとるなどと、暴拳が過ぎるのではないか。

そうは思っても、結局のところこの事態は変えられないだろう。嘆息を飲み込み、ミズガルドは寝室をあとにした。

魔法。それは理想を象る理であり、理想を律する術である。

この世界は通常、違えることの出来ない理がいくつも組み合わせりその上で出来ている。安定した不安定——と、魔法使いたちはよく口にした——の上で、人は、否人をはじめとしたすべての生物は生きている。

魔法とは、その理の中に杭を打ち込み、一瞬出来た隙間の中に自らの理想とする理を展開することだ。勿論それらは非常に不安定なものだから、長くは続かない。それが、魔法というものだ。

——と。

目の前で繰り広げられる講義に、トステイナはただただ目を瞬くしか出来なかった。

（む……むずかしい！）

正直なところ、ミズガルドが何を言っているのかさっぱり判らなかった。用意してくれた手元の黒板に判るところだけ書こうとはするのだが、先ほどからチョークを持つ手は動いていない。

「その自らの理想とする理を展開するのが魔法式だ。式にはいくつかの規則性があって、それらを組み合わせる意識の中に展開する。魔力というのは意思の力ひとつであって、種別に過ぎない。誰でも持っているんだ——ただそれを普段は魔力と認識してはいない。その意思を選別し、練り上げることで意思の力を意志——こうしたい、という魔力に変える。展開した魔法式に魔力を注ぎ込むことで、それは通常の理の中に入り込む」

そこまで一息に喋ってから、ふ、とミズガルドは言葉を切った。

「……判るか？」

「すごくよく判りません」

「だろうな」

短く頷かれ、トステイナは頭を垂れた。頭上で、大きなため息が聞こえる。

「顔を上げる。君が悪いわけじゃない」

素直に顔を上げると、苦虫を噛み潰したような顔をしたミスガルドが、卓に手をつけてこちらを見据えていた。

「俺は久しく大きい魔法なんて使っていないし、人に教えるなんてのも不得手だ。正直、俺を師とするのは間違っていると思う。だが、カーラがああ言った以上教えるしかない」

「はい……」

怒られているのか迷惑がられているのか、正直よく判らない。

「だいたい、俺は理論が苦手だ」

「はー……え？」

「苦手だ、と言っている。魔法は理論の学問だとお偉方は言うけどな。正直理論を正確に理解した覚えなんてない。だから、人に教えるのは苦手なんだ」

「そうなんですか？」

天才、と呼ばれた魔法使いの言葉に驚いて首を傾げる。

「先生は……えっと、いつ頃から魔法を？」

「俺か？ 八つか九つか……そのくらいだったと思う」

「すごい！」

「すぐくはない。だからたぶん、理論が苦手なんだ。感覚だけで覚えただけだからな」

（あ……）

肩をすくめるミスガルドの口元が僅かに緩んだのを見て、トステイナは小さく微笑む。

「どうした？」

「あ。いえ。そ、それで……どうやったらわたし覚えられますか？」
問いかけに、ミスガルドの口元の緩みがするすると消えた。すつと、立ち上がる。

「あれ、先生？」

「外に行こう。実践のほうに君には判りやすそうだ」

栗鼠やら鳥やらを踏みつけないように外に出ると、白い木の上にアグロアが座っていた。

「アグロア！ 急にいなくなっちゃうからびっくりしました」

「ンお。外に来たのかイ？ だーって、オイラあーいう小むずしい話聞いてらンねエヤア」

にか、と無邪気に笑みを向けられ、トステイナは少しほっとして笑みを返した。

「わたしも、むずかしくて」

「実践だ。邪魔するなよアグロア」

「ハイハイ」

ミスガルドはざっと辺りを見渡し、手にした本を近くの切り株の上に置いた。黒い表紙の、重くしつかりとした本だ。

「トステイナ」

呼ばれて、とてとてと近寄る。ミスガルドは重い表紙をゆつくりと開き、数頁捲る。

「これでいいか」

呟いて手を止めた頁には、何やら複雑な図形が載っている。丸と、その中に描かれたいくつもの直線や曲線。

「林檎？」

「……どう見たら林檎に見えるのか知らないが、まあ、そう見えるならそれでいい。これが魔法式のひとつだ。見ながらいい。これをその辺りの地面に描いてみる」

「描くんですか？」

「初心者の方は、描いたほうが意識の手助けになるからな」

トステイナは頷いて、きよろきよると辺りを見渡した。傍に落ち

ていた木の枝を手に取り、本を見ながら図を引いていく。

「大きさ、このくらいですか？」

「適当でいい」

「はい」

ざりざりと土を掻いていく。何度も本の元へ戻り、見では描き、見では描きと繰り返し返しているうちに何とかそれらしい図が出来上がった。

「出来ました！」

「ああ。上出来だ」

ミスガルドが頷く。顔を上げた。

「上から、どうだ。アグロア」

「問題なさそうだぜエ」

「だ、そうだ」

良かった、とトステイナは微笑んだ。ミスガルドが腕を組む。

「——今描いて貰ったそれを、通常魔法使いは意識の中で描く。ひとつの欠けもなくな。描いて貰った分、一本一本の線の間所が判り易いはずだ。この先はそれをしっかりと見据えながらやれば、自然に意識の中に展開出来る」

「はい」

「ちなみにその魔法式は、一番基礎となる光明の式だ。それだけは徹底的に叩き込め。魔法式は基礎の上に二式、三式と重ねて展開するのが基本になる」

「はあ……」

こんなごちゃごちゃとした難しい図案を基礎といわれても、正直呑み込めるかどうか不安ではあった。ただ、不安はいつだってある。不安だけを抱いていても仕方ない。

「その前に立って、図案を意識の中に定着させる。そして光明……光だな。手のひらに乗るくらいのちいさな明かりを思い浮かべるんだ」

ちいさな明かり。トステイナは頷いて、描いた式の前に立つ。じ

つと、式を見据えた。

「白い、無機質な光だ」

……白い。

「月光に似ているかもしれない。中空で、支えもなく浮くちいさな明かりだ」

……支えもなく。

式だけを見据えている中に、ミズガルドの低く澄んだ声が染み込んでくる。それこそ、意識の中に流れ込んでくるようだった。

「熱はない。ただ、静かで硬質な明かりだ」

……熱はない。

静かな声の中に、見えるのはただ式だけだった。頬を風が撫でていく優しさが、心地よい。

「……声に出してみる。明かり、と」

どこかふわふわとした意識のまま、トステイナは薄く唇を開いた。

「あか……り」

呟いた瞬間だった。パンツ、と水面を空気が叩くような大きな音がした。

「うつひゃア！」

素っ頓狂な声が聞こえて、トステイナははっとした。続けざまにパンツ、パンツと弾ける音があちらこちらでして、その度に雷の夜のように視界が白くなる。

「まぶしっ……おいおいお嬢やりす……きゃーっ」

頭上からアグロアの声が降って来る。式を凝視したまま、どうしたらいいのか判らず動けずにいるとぐつと肩を引かれた。そして、地面に描いた式が誰かの靴底で消される。

（あ……）

式が消えた瞬間、硬直が解けた。顔を上げる。ミズガルドが隣に立っていた。どうやら式を消したのはミズガルドだったらしい。

「せんせ……」

「——上出来、と言いたところなんだが」

「や・り・す・ぎ！ オイラア目ン玉ぐつらぐらだぜイ」

何が起こったのか理解出来ず、トステイナはアグロアとミズガルドを交互にきょときょと見上げた。ミズガルドは微笑を浮かべ、

「目視した限りでは十二個。君が作った明かりの数だ」

「え」

「……俺はそんなに作れといった覚えはないが、まあ、普通は出来ない。すごいな」

（褒められ……た？）

驚きが先に立ち、嬉しさは出てこなかった。ただ呆然と、ミズガルドを見上げる。

「力はあるそうだ。……制御かな。問題は」

「は、はい」

「俺はさっき言ったとおり、教えるのは下手だ。多分相当、下手だ。ただ、出来る限りのことはする。……それでいいか？」

声に含まれる確かな優しさに、トステイナは大きく頷いた。

「はい。お願い、します」

その日から、トステイナとミズガルドの奇妙な生活は始まった。

朝はアグロアが起こしに来た。水場はまとめて家の外にあったので、顔は外で洗う。トステイナ自身、朝は早いほうだと思っていたが、ミズガルドも同じらしい。まだ空気が朝の清涼感を保つ頃にきちんと起きてきて、てきぱきと食事の準備と一緒にやってくれた。

朝食は毎朝同じ献立だった。焼いたパンと、ベーコンと卵。それから、あたたかい紅茶だ。食料は何日かに一度、まとめて配達を頼んでいるとミズガルドは言っていた。紅茶はミズガルドが好きなように、何種類も葉が並べられていた。その日の気分で選ぶらしい。

朝食を済ますと、ミズガルドは研究室と呼ぶ部屋にこもり仕事をしている。薬の調査を生業としていたとのことだった。魔法使いはこういったことも、得手としなければならぬと言われた。

その間、トステイナは部屋の掃除をしたり、洗濯をしたりと家事を一手に引き受けた。実のところ、カーラに連れて来られた日、家に置いてもらう為の対価を稼ぐために何日かは外に出て仕事があったと申し出たのだが、それは頑なに拒否された。金銭的なものは一切受け取るつもりはない。そういった身の回りの世話も含めて弟子をとるとのことだ。と、何度も言われた。結局、それ以降言葉に出すとミズガルドが不機嫌になるので、トステイナは甘えることにした。その代わり——と言えるのかどうかは判らないが、家事を担うことにした。これには、ミズガルドも反対はしなかった。

洗濯物はよく乾いた。アグロアが戯れに風を吹かせてくれるのだ。ぱたぱたと白い森の中ではためく洗濯物が、トステイナは好きだった。

「アグロアはすごいですね。風を吹かせるのが上手です」

「んー、お嬢とつきどきズレてンなア」

「そうですか？」

「オイラ風だぜエ？　オイラが気持ちよツくなればア、風はどこにでも吹くさア」

「そっか。それも魔法ですか？」

「どうかねエ。オイラたち風の民は、あんま考えなくても風なら吹くからなア」

お昼になると、ミズガルドがのそのそと部屋から出てくるので一緒に簡単な昼食をとった。

午後になると、ようやく講義の時間だった。とはいえ、最初で懲りたのか、理論的なことはほとんどやらなかった。森へ出て薬草を調べたり、式を描いては練習したりの繰り返しだった。その時々で休みながらトステイナはミズガルドに色々な質問をした。

「先生はアグロアと仲良しですね。いつから仲良しなんですか？」

「……仲良し、かどうかは判らんが、そうだな。ここに住み始めてからはよく顔を出す」

「いつぐらいからここに住み始めたんですか？」

「二年ほど前だ。その前は、しばらくあちこちを放浪していた」

相変わらずの渋面だったが、ほとんどの場合きちんと答えを返してくれた。それが嬉しくて、トステイナはまた質問を重ねていった。質問し、学び、知る。

そこに楽しみを見出し始めた頃、気付くと一月が過ぎようとしていた。

「トステイナ。今日は少し遠出をしよう」

昼を終えたミズガルドがそう言ったとき、トステイナは最後の果実を頬張ったところだった。このまま咀嚼を続けていいのかどうか判らず、そのまま固まってしまふ。

「……食べ。いいから」

促されたので頷いた。酸味の強いスルラの実を咀嚼し、嚥下する。
「えと、遠出ですか？」

「そうだ。まあ、言うほど遠くはないんだが、君、あまりこの家から離れたことがないだろう」

静かに頷く。「なら、行こう」とミスガルドが決めたようだったので、食器を片付けて、慌てて準備をした。——といっても、持つものは水筒くらいなのだが。

ミスガルドは相変わらず、この季節には暑そうな長衣のまま、いつもの本を携えていた。

ミスガルドとアグロアとトステイナと。三人でゆつくりと白い森を進んでいく。

「ここって、昔は緑だったっておじいちゃんが言っていました。先生とアグロアはご存知ですか？」

「オイラはあーんま覚えてねエけど、ま、知ってはいるかなア」
「先生は？」

ふ、と一瞬、ミスガルドの歩が遅くなった。が、問いかける間もなく、また同じ速さで歩き始める。

「綺麗だったのは覚えている」

硬い声に、トステイナは僅かに首をかしげた。ミスガルドの横顔を見上げるが、いつもどおりの眉間の皺では、考えのひとつも読めなかった。

しばらくは歩いた。しかし、あの日のようにならないようにと気をつけてくれているのか、休憩は多く挟んでくれた。

やがて、森の中にぽっかりと空いた空間に出た。

「わ……」

思わずトステイナの唇から声が漏れた。

木々の合間に広がった草原は、青々とした夏草を湛えた美しい場所だった。頭上には白い葉が、しかし足もとには深い緑が鮮やかな絨毯が広がっている。木漏れ日を受けて、輝いて見えた。

何よりトステイナが驚いたのは、そこにちいさな湖水があったからだ。

川のような水脈がないところを見ると、湧き水なのだろう。ミズガルドを見上げると、ちいさな頷きが返って来た。ここだ、ということだ。嬉しくなつて、湖水の傍に駆け寄る。それほど大きくはないが、透明な水はたつぷりとあつた。袖をまくり、手を浸す。

「つめたい」

熱を奪い取っていく涼やかさに、トステイナは頬を緩めた。

「先生。素敵なところですね」

「……そう、だな」

「？　どうかしたんですか？」

「いや」

短く首を左右に振り、ミズガルドは傍の木陰に腰を下ろした。本を、手近な岩の上に置く。

「ここなら、少々派手な失敗をしても問題ないだろう。水の魔法も練習が出来る。俺はここで見ているから、存分に試せばいい」

「お。練習かい？　ンじゃア、オイラは暴走お嬢の被害受ける前にどッか行つておくぜイ。ヘヘッ」

「あつ、アグロアひど……」

言い切る前に、風の少年は姿を消してしまった。ぷ、と頬を膨らませていたトステイナの耳に、微かに抑えた笑い声が聞こえてきた。

「……先生、もしかして笑ってますか……？」

「……いや。その。すまない。気にしないでくれ」

俯いて右手で口元を覆うミズガルドに、ぱたぱたと左手を振られ、トステイナは釈然としないまま師を見つめた。

が、すぐに取り直して、笑顔を浮かべる。

「じゃ、わたし、練習しますっ」

暮らし始めて一月。

初めて、ミズガルドの笑い声を聞いたのが何だかとても嬉しかったのだ。

魔法は、一式二式、と式数があがるにつれて難しくなっていく。

ひとつの式——図案だけで出来るのが一式。その上に別の図案を重ねるのが二式、となる。トステイナはまだ基礎の一式も満足に出来ないが、ミズガルドにどの程度出来るようになるものかと訊ねた時に、無造作に七式、と返って来て絶句した。

そうなるまでに果たしてどの程度掛かるのか。想像も出来なかったが、まずは基礎と言われた一式からだ。トステイナは魔法式辞典を凝視しながら、地面にひとつ、ひとつ、と描いていく。

まず覚えろ、と言われたのは基礎の一式が五つだ。明かりを灯すもの。火を熾すもの。水をもたらすもの。風を吹かせるもの。そして、草を生やすもの。

どれもまだひとつとして、きちんと出来はしない。何とか形にしたいくて、トステイナは繰り返し繰り返し描き続けた。描いて、唱え、失敗する。何度か繰り返し返したとき——

「…………あれ？」

ふと、トステイナは気付いた。木陰の傍で、ミズガルドが座ったまま、うつすらと寝息を立てている。

そつと、足音を忍ばせて近づいてみた。覗き込む。俯いているのでよく見えなかったが、前髪の隙間から見たのは、しっかりと閉じられた目蓋だった。

（こうしていれば、眉間の皺ないんですねえ）

こっそり胸のうちだけで呟く。ほんの少し、眺めていたい気もしたが、起こしては可哀そうだと思って距離をとった。数日に一度、朝方ミズガルドは悪夢でも見るのか呻いている。今朝もそうだった。本人は気付いていないようだが、悪夢が疲労を残していくことをト

ステイナはよく知っていた。だからきつと、うたた寝してしまっているのだろう。

もう少ししてから起こそう。それまで、自分は自分のやるべき事をしておけばいい。

頷いたトステイナは、少し考えてから場所を移すことにした。自分の下手な魔法で大きい音を立ててもしては、師の眠りを妨げてしまいかもしれないと思ったのだ。

湖水から、ほんの少し先。広場、とまでは行かないが木々の合間を見つけてトステイナはそこに決めた。ここまでなら、まだ視界に湖水も見えるし、迷わずに帰れるだろうと判断したのも要因のひとつだ。

顔を上げる。

ぬけるように青い空に、薄い雲がさらさらと流れていた。チチチ……と鳥の鳴く声がする。目を細めて風を感じる。綺麗だ。胸いっぱい森の空気を吸い込み、トステイナは手にした木の枝を地面に突き立てた。

本来魔法に、式を描くという手順は不要だ。ただ、描いてそれを見たほうが集中しやすいので初心者描くのが基本だと教わった。

（よし……草の魔法にしましょう）

一式の中でも少々風変わりだ、とミズガルドは言っていたが、魔法書の中でそれを見つけたときに何だかとても心が惹かれた。トステイナは村にいたときも、家の周りを花で埋め尽くすほど、植物は好きだった。

（そうだ。魔法書を見ないで描いてみようかな……？）

ふと思いつき、魔法書に伸びていた手を引っ込めた。何度も何度も描いたので、さすがに覚えているはずだ。決心して、何も見ずに描き出す。なんとか、記憶の中にある式と同じものが描けたあたり

で、トステイナは大きく深呼吸を始めた。息を整え、意識を研ぎ澄ましていく。

過ぎていく風の肌触り。降り注ぐ陽射し。揺れる影。耳をぬらす葉擦れの音。草いきれ。微かに流れてくる水の匂い。身を包む暑い空気。それら。世界を象るすべてを感じていく。すべてを受け入れること。すべての理を理解し受け入れて始めて、世界は自分の理を受け入れてくれる。ミスガルドが何度も言っていたことだ。

ゆっくり、ゆっくり深呼吸を繰り返していくと、やがて聞こえていた音も感じていたすべても判らなくなっていく。ただ、地面に描いた式だけが大きくなっていくように見える。

そして、トステイナはゆっくり唇を開く。

「萌える草」

刹那――

ドンツ！ と派手な音が集中を吹き飛ばした。目を見張るトステイナの前、式を描いた地面から強大な樹木が生えてきた。鮮やかな緑の葉をつけた樹木が、青空へ向かって伸びていく。

「うえ……ええ」

声にならない声が漏れた。こういう時、式を解けばいい――ようは意識の中から式を消せばいい――と教わってはいるが、どうしても上手く解けない。それどころか、まるで脳裏に焼きついてしまったかのように、地面に描いた式が強く印象に残る。

「うわ」

（……へ？）

耳慣れない声が聞こえた気がして、トステイナは目を瞬いた。ただ、それ以上は動けなかった。ずずず、と振動する地面と伸びていく木の幹のおかげで、視線が地面に固定されたままでも、樹木の成長が止まっていけないのが判ったからだ。

（とととめなきやでとめるにはとめて……ええええと）

すっかり混乱したトステイナの肩が、ふいに、ぐっ――と後ろに引かれた。同時に、誰かの足がざつと乱暴に式を消した。

(あ)

その瞬間、脳裏に焼きついていた式も同じように消され、それはつまり、式の解除を意味していた。ぴたり、と揺れが収まる。

ふはあ、とトステイナは大きく息を吐いた。そのときになって、自分が今まで無意識に呼吸を止めていたことに気づく。心臓がどくどくどく、と早打っていた。

振り返る。

「先生ごめんなさ——」

言いかけて、言葉を呑んだ。トステイナの後ろ。肩に手をかけて立っていたのは思い描いていた師ではなかった。

陽光に照らされ輝く金の髪。水色の緑柱石のように、鮮やかな蒼緑の瞳。すつと通った鼻梁も、柔らかに笑みを象る淡色の唇も、驚くほど整った顔立ちの青年だった。身長はミズガルドと同じくらいだろうが、受ける印象はずいぶん違った。黒髪に黒い長衣のミズガルドが夜ならば、彼は明らかに昼だろう。衣装も見ると高級そうな布地に、細やかな刺繍が刻まれている。さりげなく首から下がっている宝石飾りも、トステイナには一生触れることも叶わないだろうと思わせるほどの輝きを閉じ込めていた。

「お怪我はないかい？ お姫様」

「おひ……」

さらに、と紡がれた涼やかな声とともにもない言葉に、トステイナは思わず絶句した。二秒ほど固まってから、慌てて後退る。

「あああああのっ」

姫を否定するべきか、それとも礼を言うのが先か。一瞬の混乱の後、トステイナは後者を選択した。ぺこりっ、と大きく頭を下げる。「ありがとうございましたっ」

「いえいえ」

くす、と笑われた。頬が熱くなる。顔を上げると、涼やかな笑みがそこにあった。とても美しく整った笑みだ。なるほど、と少し思う。この顔立ちなら、先ほどのとんでもなく芝居がかった恥ずかし

い台詞もさうりと紡げるわけだろつ。

「可愛いお姫様にお怪我がないのが何よりだね。大丈夫？」

「えっ、あ、けけけ、怪我はないですっ、けど」

「けど？」

「わ、わたしお姫様じゃないです！」

見上げて、言い切る。美しい青年は、一瞬きよとした顔を見せてから、やがて大きな声で笑い始めた。

「えっ、えっ？」

「はは、いや。失礼。可愛いレディはみんなお姫様なんだよ」

秘め事でも話すかのようにそつと人差し指を口元に立てて、彼は片目を瞑った。そういった仕草が、嫌味なく決まるあたりが不思議だった。

「は、はあ」

「ところで、名前を伺っても？」

「あ。わたし、トステイナです。ティナって呼んでください」

「ティナか。朝露のように美しい響きの名前だね。君にぴったりだ」

「あ、はは……」

どうも、トステイナの人生の中でこの手の言動をする人物にあったのは初めてなので、受け答えの言葉に苦慮してしまう。

「ティナは魔法使い、なのかな？」

「いえ、あの、見習いで……失敗しちゃって。あの……助かり、ました」

「ああ、いえいえ。気にしないで。僕も昔齧ろうとしたことがあったね。同じように助けて貰ったことがあるんだ。おあいこさ」

「あいこ？」

「人にしてもらった行為は別の人に返すのさ。そうして、その人がまた別の人に、とすることで行為は回っていく。僕の持論」

単純でしょ、と微笑まれ、トステイナは微かに笑みを返した。そ

ういった世の中は理想だろう。

トステイナは青年をそつと見上げる。綺麗な顔立ちに、綺麗な身成。歳は自分よりは上だが、ミスガルドよりは下だろうか。魔法、なんてものに頼らずとも、何かと生きていく術には事欠かなそうな雰囲気はあるが、何故魔法を齧ったのだろうか。

「魔法、お好きなんですか？」

「んー？ どうだろ？ 身近に使う人はいて、面白そうだなと思って齧ったんだ、昔。僕には合わなかったみたいけど」

「はあ。あ、あの。お名前は？ どうしてここにいらっしやったんですか？」

「ここにいたのは昼寝のためー。時々くるんだ、ここ。あと、僕の名前はね、ユウ」

「ユウさん？」

「ユウでいいよ、テイナ」

につこりと、柔らかく微笑まれ。思わず頬が熱くなる。その時、背後から聞きなれた声がした。

「——テイナ！ 何事だ！」

「あ。先生……」

振り返ると、白い森を背に、顔をしかめた師がこちらに向かってきているところだった。おそらくは、先ほどの失敗の音が師を起こしてしまったのだらうとトステイナは頭を下げた。

「ごめんなさい！」

ぺこつと頭を下げてしばらく。小言でも降ってくるかと思ったのだが、それすらもなく、これはもしかして相当怒っているのだろうかと恐る恐る顔を上げる。

そしてトステイナはぱちくりと目を瞬かせた。

眼前の師は、何か恐ろしいものでも見たかのような顔で硬直していた。しかしその視線の先は、トステイナではない。

「……？」

師の視線を追って後ろを向くと、青年——ユウがにこにこ微笑

んでいる。視線を前に戻すと、苦い顔の師。二人をきよときよと見比べて、トステイナは恐る恐る、

「お知り合い、ですか？」

と、問いかけた。

「そうだよ。とっても仲良し」

答えたのはユウだ。が、その言葉に師の表情は深くなる。気にした様子もなく、ユウはにこにこ続けた。

「お久しぶりだね、ミズガルド」

「……ご無沙汰しております」

「あつはは、相変わらずの無愛想だねー」

（こ、これは何か、その……こ、こわい気配……？）

ひとりはとてにこやかなのに、もうひとりの顔が厳しすぎるせいで、空気がぴりぴりと痛い。間に挟まれたトステイナは、曖昧に笑みを浮かべるしかない。

しかし、ユウの方はそういった空気に臆する気配もなかった。

「そうそう。ミズガルド。聞いた？」

「何をです」

あっけらかんと言葉を紡ぐユウに、煩わしそうにミズガルドが答える。

「——もうすぐ。君の望んだ時代がきそうだよ」

ふと。声音が変わったことにトステイナは気づいた。何かを値踏みするかのような、あるいは試すかのような、静かな中に潜む確かな感情を、声音は宿している。

「じゃあ、ね。ミズガルド。テイナもまたね」

ふっと、声が和らいだ。先刻までと同じ無害そうな笑みを浮かべ、軽やかな足取りでユウが去っていく。その背中を見送り、ミズガルドがふつと息を吐いた。

「テイナ」

「あ。はい」

「怪我はないか」

「ないです。ユウさんが、助けてくださって」

「ユウ……か。まあ、いい。無事なら。心配をかけるな」

くしゃつと頭をなでられる。なぜかほつとして、トスティナはもう一度、問いかけた。

「先生。ユウさんとお知り合いのですか？」

「……昔、な」

それ以上答えず、ミズガルドは歩き出した。師の背中を追いかけるながら、トスティナは考えていた。ユウが、ミズガルドに告げたあの言葉を。

（——先生が望んだ時代って、なんのこと、何だろう？）

冴えた月光は、冷たく部屋を突き刺す。

彼は、余計な明かりを好まなかった。故にこの時間においても、部屋にはひとつのランプもなく、ただ月明かりだけを光源としている。

「それが解決だと、我が主は考えるか」

小さく、彼は呟いた。声は薄闇の中で溶けて消える。目を閉じた。

【国王の為の七人】と、人は彼を呼ぶ。だが、と皮肉に笑った。

彼が忠誠を誓ったのは、前王だ。現国王ではない。

前王の考えに、傾倒はした。しかし、現王はそれを、まるで否定するかのように動いてばかりいる。何が、【国王の為の七人】なのか。

そつと、書き物机に置いた紙を爪先で弾いた。小さな文字で、市内で起きた些細な騒動について書かれている。同僚が関わった事件の顛末書だ。なんでもない、些細な事件。普段は一つの書類として処理されて終わりであろうそれを、彼はこうして手元に持ってきていた。

それはとても些細な出来事だ。だが。

大きな意味を持つ出来事でもあった。

「スレヴィの天災に働いて頂くか」

6（後書き）

次から三章になります。

「魔法薬は、魔法の中でも面倒くさいジャンルではある」

ミズガルドが、仕事道具である幾つかの透明な容器をピンと弾きながら話していた。

「薬草を探して、煎じて、それに魔法をくわえて変質させ、変質したものを調合し、また仕上げとして魔法を施す。正直面倒以外の何物でもない。ただ、通常の魔法に比べて利点が多い。判るか？」

「えと……効果が持続しやすい？」

「それもある。特に病気なんかはな。長期的に効くものでないと意味が無いし。あとは単純に、取り扱いが簡単になる。薬の形なら、一般人でも扱え、さらに持ち運べるからな」

ミズガルドの講義に、トステイナはこくこくと頷いた。

魔法の講義は、毎日午後一で行われる。しかし今日はどういうわけか、午前中にミズガルドから声をかけてきた。初めて仕事部屋に入れてもらい、トステイナは様々な道具が並べられた部屋を見渡した。本や薬草、道具、と所狭しと並べられているせいで、地震一つで色々壊れそうではある。

「さて。……とりあえず、やってみるか」

幾つかの道具と材料を机に並べ、ミズガルドは「ティナ」と呼びかけてきた。論より実践。いつのまにか、ミズガルドとトステイナの間にはそういった空気が生まれていた。ミズガルドの教えに従い、トステイナは真剣に取り組んだ。

そして――

ぱんっ！ と爆発した。

がしゃんっ！ と何かが倒れた。

ひゃああっ！ と悲鳴が上がった。

それらすべてを、少年の笑い声が包み込んだ。

「アハッアッハハハハ、ひい、すんげエなアティナ！」

「アアア、アグロア、笑い事じゃありませんー！」

半ば涙目になりながら、トステイナは両手をぱたぱたと振り回した。空中で腹を抱えて盛大にぐるんぐるん回りながら笑っているアグロアが、その動きだけでまた笑っている。

その前で師はといえば、ただ静かに瞼を下ろし、不機嫌そうな顔で黙り込んでいる。

ぽた、ぽたと。

師の髪の中から、幾しずくか透明な液体が垂れていた。今しがたトステイナが爆発させ、ミズガルドが頭から引つ被った魔法薬（出来損ない）だ。

その成果は、現れている。

「……君は、俺が嫌いなのか？」

「ととととんでもないです！」

泣きそうだった。その言葉自体も痛い、何よりトステイナは目の前の惨状に泣きそうだった。それが、己が招いたものだということも含めてだ。

木だった。それはどう見ても木だった。

ミズガルドの黒髪の上、そう高さは無いが、太く濃い色をした幹と白い葉をつけた木が生えている。

——ミズガルドの頭から、確かに木が生えていた。

「俺は成長剤を教えたはずだったんだがな……」

「わたしもそれを教わったはずで……した」

「うひひっ、ひー、いやアたぶん成功はしてんだぜい、これ」

笑いながらアグロアが言うので、トステイナは恐る恐る彼を見上げた。

「せい……こう？」

師の頭に木を生やしておいて？

「だっと思うぜい。この木、パッセの木だしねい」

「ああ……」

ミズガルドまでもが苦々しげに頷いたので、トステイナはきよと

きよと二人を見比べた。

「パッセですか？」

「パッセの木サア。青いちっちゃえ花を咲かせンだけんど、今の時期、ちようと種子飛ばしまくってンだアねイ」

「外に出た時についたんだろうな。……くそ」

「ぐぐぐ、ごめんなさいっ」

「……、いや、仕方ない」

苦虫をまとめて噛み潰したような声で呻かれても、説得力がない。しよぼんと肩を落としたトステイナの前で、ミズガルドはのっそりと動き出す。その瞬間、ごっ、と鈍い音が部屋に響いた。

「せせせせんせいいい」

「ひい、ひい、アンタ今、ノッポなんだから氣イつけなッてエ」

戸棚に頭から生えた木を盛大にぶつけたミズガルドが、ゆっくり、ゆっくり、息を吐いた。

「……薬を作る。成長を解くものを」

「作れんのかイ？」

「……ルーシャの実があればな」

ざつと辺りを見渡し、眉間に皺を寄せたまま低く呟く。

「ないのかイ？」

「切らしてる」

「わっ、わたし採ってきます！」

「待て。落ち着け。今の時期にあるか馬鹿」

呆れた声を出された。それから、ミズガルドは天井を睨む。その拍子に、木が後ろにあった棚を殴ったがもう気にしないことにしたようだった。

「風」

「はいよオ？」

「カーラに頼んでくれ。持ってきてくれと。街なら売ってるだろう」
アグロアがきよとんと首を傾げた。

「頼むくれエなら、オイラだって街まで行ってもいいけど、カー

ラの姉ちゃん、今日なんか会議とか言ってなかったつけかア？」

あ、とステイナは小さく声を上げた。カーラと最後に会ったのは一週間ほど前だが、確かにその時に言っていた気がする。ミズガルドも思い出したのだろう、また小さく嘆息した。

「せ、先生。あの、わたし買ってます……！」

「一人では行くな」

「え」

一瞬言葉を失ったステイナの前で、ミズガルドは軽く口を手で覆い、アグロアに目をやった。

「アグロア。頼めるか」

「えー。アンタ自分で行けばいいじゃねエかア」

「俺は」

何かを言いかけ、ミズガルドはそこでふつと言葉を切った。

「先生？」

「……俺は行けない。これではな」

これ、と頭を指される。

「う、うう。えと、あの、伐採……？ 剪定……？ して、いけば

その」

「そういう問題じゃない」

「相変わらず街は避けるねイ」

アグロアの言葉にステイナは目を瞬かせた。

「え？ 先生……街はお嫌いですか？」

そつと問いかけるが、ミズガルドは答えない。ステイナはどうしていいか判らず、そつと足元を見つめた。

口を噤んだ二人を見て、アグロアが盛大にため息を吐いた。

「ったく、しゃーねエのなア！ 貸しだぜイ、お二人さん！」

言うなり、空中でアグロアがくるんつ、と回転した。同時にぽんと軽い音がして、足元に再度近づいてきていたはずの栗鼠たちがまた一斉に逃げ出した。その床へと、ふわっと少年が降り立った。

瞳の色はいつも同じ藍色で、顔の造形もいつもどおりだ。ただ、

普段なら眩しいばかりの白髪が栗色に染まっており、服装も、いつものやや珍妙な涼しげな格好ではなく、普通の人と同じような格好だ。

「……ア、グロア？」

「へっへーんっ、似合うかい？」

「すごいですー！ 似合いますー！ どうやったんですか！？」

「幻視だろう」

と、答えたのはミズガルドだった。顰めっ面のまま、続ける。

「本質が変わったわけではないが……簡単に言えば、見る側を錯覚させる魔法だ。一般的に民は得意とされている」

「せいかーいッ。ま、ちいっと面倒くせエんだけんどなア、ま、同士の為なら仕方あנםエ」

「同士ですか？」

「ん、そのわがまま坊ちゃんのことサア」

にっつと、アグロアが笑う。

「こんなら、街に行けるぜイ。ティナと行ってくりやアいいかい？」

「一人で」

「オイラア、アンタらの金とかよつく判んねエぜイ？」

「い、行きます行きますわたし行きます！ いいですよね、先生！」

振り返ると、ミズガルドは苦々し気な顔のまま、はぁ、とため息と共に頷いた。

花模様の石畳の道を、並んで歩いて行く。隣を歩く少年は軽やかな足取りで、鼻歌交じりで楽しそうだ。トステイナはしっかりと鞆を抱えたまま、微笑みかけた。

「アグロア、ご機嫌ですね」

「へへっ、坊ちゃんは心配してンだろオけどなア。オイラア、ティナと出掛けられんのは楽しいサア」

「わたしも楽しいです」

以前に街に来たときは、例の物盗り騒ぎで慌ただしかった印象が強い。今日は今日で、出掛けるときにさんざんミズガルドからいろいろな諸注意を言い渡されたが、それでも、アグロアと二人で買い物を買ったのはなんとなく、嬉しい。

「でも、先生すごく心配してましたね」

「なアー。おかーさん、みたいになつてたよなア、ミズガルド」
「けっ、と笑うアグロアに、トステイナは軽く首を傾げた。

「おかーさんってああいうカンジですか？ 寄り道しちゃだめ、とか、知らない人についていくな、とか」

「ん？ ああ。そっか。ティナ、かーちゃんいねエんだっけかア？」
「覚えてないんです。おじいちゃんに拾われる前のこと、全然」

「へエ。そっかア。ま、いろいろあるさアなア」

アグロアがひよい、と肩をすくめる。ふっと空を見上げる栗色の髪をしたアグロアの横顔が、いつもより少し大人びて見えた。

雑多な街中を、アグロアはひよいひよいと人ごみを抜けていく。その背中を追いかけながら、ミズガルドの渡してくれた地図を手に薬剤店を目指す。日差しは暑いが、街中を渡る水気を含んだ風のお陰で、心地悪くはない。出掛けるにはいい日和だった。

「アグロアはご家族いらっしやるんですね」

「うん。オイラんとは、みーんな元気サア」

「風の方々は、風の方々に住んでらっしゃるんですか？」

周りに聞こえないように、少しでも声を小さくして訊ねる。アグロアは、恥ずかしそうに鼻を鳴らしながら頷いた。

「ま、鬱陶しいけど、いるのはいいことサアねイ」

他愛ない言葉を交わしながらトステイナはアグロアと二人、地図を睨みながらなんとか目当ての店へとたどり着く。目当てのルーシヤの実は、瓶詰めにして売られていた。赤く小さな、クランベリーのように見えるそれを購入し、ほっと息を吐く。帰りの道のりも、アグロアはご機嫌なようだった。

「それ、なんの歌なんですか？」

「ん？ オイラが今歌ってたやつかい？」

「です」

「民に伝わる伝承歌ってエのかなア。民も人も今みてエにバンラバラじゃアなかった頃を、おもしろおかしく歌ってるやつさア」

なるほど確かに、アグロアの口ずさむ歌は、軽やかなメロディラインが華やかに心地よい。

「テイナは知ってるかなアとも思ったんだけどねイ」

「え？ どうして？」

「そりゃあ」

そこまで言った時、ふっとアグロアの表情が硬くなった。無造作に、トステイナの手を掴む。

「……同士だかなア」

「どう……？」

「テイナ」

短く、強く。アグロアが囁いた。

「オイラを信じるかい？」

一瞬、何を言われたのか理解出来なかった。何を、どういう事を、信じるのか。しかし、アグロアを、というのなら答えは簡単だった。「信じます」

にっと、アグロアが口の端に笑みを浮かべた。そのまま、細い路

地へと入っていく。歩く速さは変わらない。角を幾つか曲がり、暗い路地の奥へ。

行き止まりには、少し据えた匂いが染み付いていた。日差しも、影になっただけであまり差し込んでいない。そんな場所まで来てから、アグロアは唐突に足を止めた。トステイナの背中を押し、行き止まりの壁へと寄せる。そして、振り返る。

「え……」

トステイナは思わず小さな声をあげていた。

人がいた。二人。どちらも成人した男性のようだったが、逆光で顔はよく見えなかった。身に纏っているのは見慣れない洋装だが、それが地位の高い者の制服であることはすぐ知れた。襟章に目を留める。それが何なのか。よく見る前に、アグロアの声が意識を遮った。

「御用でイ？」

「——失礼」

低い声だった。

「以前、この街で起きた物盗りのことで、少々証言を頂きたく思いました。そちらのお嬢様にお越し頂きたいのですが」

「わたし……しです、か？」

「へっ」

アグロアが一蹴した。ふんつ、と鼻を鳴らして、二人を見やる。

「おつかしイゼイ、アンタら。治安ケーサツとかじゃアなくって、すつとばしてイキナリ宮廷審理会がお出ましかイ？」

宮廷審理会。その言葉に、トステイナは目を見開いた。詳しくは知らないが、国の重要案件を取り扱う、治安警察の上の組織だったはずだ。

たしかに、ただの街中の物盗り案件に出てくる名前ではない。

「事情がありまして。お連れの方には申し訳ないですが、わたくしたちが用があるのは、そちらのお嬢様です」

「ジョーダンじゃアねエヤア。なんるほど？ あのお坊ちゃんがテ

イナを一人で街に行かせたくなかったわけかア。大方アンタら、コイツが物知らずとも思ってたやっつてんだろ？ 姑息だねイ」

刺々しいアグロアの言葉に、空気がぴりぴりとしびれる気配がした。不安はあった。ただ、アグロアが強く手を握ってくれていたの
で、怖さはない。

「――何者だ」

低く、冷たい声だった。

「オイラカイ？ オイラは」

アグロアがそつと、ティナの肩を抱いた。

「――風サア！」

たんつ――！

軽やかな音と同時に、視界がぶれた。日陰から、日なたへと。眩しさが一気に目を刺し、風が頬を叩く。

「ひゃ……」

「しつかり捕まってるよオ、ティナ！」

飛んでいた。アグロアに抱えられ、トステイナは空に浮かんでいた。眼下に、見上げている二人の男が見え、それもやがて視界から消えた。石造りの街並みが離れていく。青い空に抱かれるようだった。

街が、小さく見える。

「ティナ！ 大丈夫かア？」

「はっ、はいいつ……」

「そこに降りつぜイ」

ふつと、心臓が揺れる感覚に襲われる。次の瞬間、トステイナはアグロアに抱えられたまま、どこかへと降り立っていた。とはいえ、まだ、高い。

「こ、ここは？」

「時計塔だアねイ。判るカイ？」

尖塔の一部に当たるらしい。そつと降ろされて、トステイナはその場に座り込んだ。高くて、さすがに立ってはいられない。

石で出来ている時計塔の端に腰をかける。背中を壁にもたせかけ、短く息を吐いた。アグロアは怖くはないらしい。飄々とした様子でその場で立っている。

下は見ないほうがいい。自分で自分に言い聞かせ、顔を上げる。

「あ」

「ン？」

「アグロア、髪」

「ああ。解いちまった。まア、そのほうが飛びやすいかなア。なアんか胡散臭くて、オイラあの場でいたくなかったんだアねィ。悪いねェ」

「いえ。ありがとうございました」

ぺこり、と頭を下げる。白髪に戻ったアグロアは、服装もいつものどりの軽やかなものとなっていた。

「大丈夫かア、ティナ」

「あは……まだ、ドキドキってます」

胸を押さえて笑ってみせる。「でも」とトステイナは続けた。

「わたしも、なんか変だと思いました。……助けてくれてありがとう、アグロア」

ゆるく微笑むと、アグロアは少し困ったように苦笑した。その顔を見上げ、トステイナは静かに切り出した。

「これ、持って。先生のところに行ってくださいますか？」

先ほど購入したばかりのルーシャの実が入った袋を差し出す。アグロアは戸惑った様子で受け取った。

「ティナ？」

「先生に、伝えに行ってください、アグロア」

「何言ってるんだい、ティナ。それならオイラ、アンタ連れて行くさア」

「でも、アグロア」トステイナは小さく笑った。

「飛ぶの、いつもよりずっとずっと、遅かったです。わたしを氣遣ってくれたのでしょうか？」

抱いて空を飛んでいるとき、ゆっくりにすら感じたのはそのせいだろう。いつも、アグロアは一瞬でいなくなる。それほど、早い。

アグロアがバツの悪そうな顔をしている。少し首を傾げ、トステイナは囁いた。

「風は身一つで吹くほうが早いです。大丈夫。ここなら誰も来ません。お願いできますか？ アグロア。これを先生に届けてください。それから、お話ししてください。なんだかおかしいです、こんなの。先生にお話してください」

アグロアは少しの間、迷ったようだった。だが、ややあつてゆっくり頷いた。

「オイラ、すぐ行ってすぐ戻ってくつから、テイナ、絶対ここ動くなよ？」

「はい」

頷く。アグロアはふっと短く息を吐いたかと思うと、その瞬間にはもうその場にはいなかった。

空が青い。

不安が胸の奥を押し上げてくるのを感じながら、トステイナはじつと空を見上げた。

——信じよう。

きつと、大丈夫だと。

「……毎回ここに来るたびに訊いている気がするけれど、今日も訊くわね。何ごと？」

扉を開けるなり、カーラは冷ややかに呟いた。

「……うるさい」

ミズガルドは低く呻き、頭に残った切り株をそつと手で隠してみた。無意味だと判つてはいたのだが。

「頭になに生やしてるの貴方」

「……木だ。バカがしくつたんだ」

「解きなさいよ」

「材料が足りん」

呻くように答えると、カーラは諦めたような仕草で頷いた。座るわね、とその場の椅子に無造作に腰を下ろす。

ミズガルドはそつと頭の上の切り株を撫でてみた。多少、切つてみたのだが——邪魔で邪魔で仕方なかった——根が髪の毛の根本と絡んでいるらしく、これ以上はどうしようもなかった。

「……で？ そっちこそ何のようだ。今日は会議とかでこれないかもしれないんじゃないじゃなかったのか」

「ええ。終わったから来たの」

端的な答えに、思わず眉根を寄せた。

「早いな」

「会議つて名前だけね。ただただ決定事項の報告みたいなものだったから。——ティナと風は？」

「使いに出している」

頭を指すと、それだけでカーラは理解したようだった。短く頷きを返してきた。

「そつ。ちょうどいいかしらね」

「何がだ？」

膝に飛び乗った子猫を撫でながら、カーラが囁く。

「とうとう、王が決めたみたい」

「決めた？」

「和平を」

短い言葉。思わず、ミズガルドは息を呑んだ。静かに、細く吐き出し、自らも近くの椅子に腰を下ろす。足元に近寄ってきた子犬を抱き上げて膝に乗せた。

「……そうか」

沈黙が落ちた。小動物たちの足音が耳に痛い。ややあつて、カーラが微笑した。

「複雑？」

「いや。……いいことだろう」

九年前。長きにわたる人と民の戦争は休戦という形を持っていた人は集結した。しかし、あくまで休戦だ。いまだに、定義上終わってはいなかった。危うい状態だと、国の上層部は常に理解していた。それを現国王は終止符を打とうとしているということだ。悪いことのはずはない。

「——反応は？」

「賛成が四人、反対がふたり。どっちでも、上の決定なら従うつてのがひとり」

訊かれることは想定していたのだろう。カーラはすんなりと答えた。

「【国王の為の七人】でそれか」

「ええ。こうなると他の重臣たちも揃って大歓迎とはいかないでしょうね」

いわゆる【国王付き】と呼ばれるのは、宮廷魔法師【国王の為の七人】に、近衛兵団【国王の為の五人】、政務官【国王の為の九人】、それと数名の側近がいる。政務官たちは国王付きの名は課せられてはいるものの、政治のために国王にノーを言うことも少なくはない。しかし、宮廷魔法師うちから反対意見が出るようでは、他の国

王付きからもどういう反応があるか、難しい所ではある。

「前王の威光はまだでかいか」

「小さくはないでしょうね。今の王とは考え方が違いすぎるわ。前王の崩御も、正直きな臭いところはあるし」

ミズガルドは軽く頷いた。公で人の口に上ることはないが、以前からそういう噂は囁かれている。現王は、もともと王位継承権四位にあたる末弟の王子だった。それが兄たちが次々と亡くなり、まだ若かった王も病死し、結果的に王になった。王位についた時にはまだ十代で、あまりの若さに国民の間からでさえ危ぶまれる声が漏れたものだ。だが、数年の間に王は現行組織の組み換えや地域の医療制度促進などに見事に手腕を発揮し、今彼を若さ故に危ぶむ声はないといっている。

だが、現王は少々風変わりな所がある。その一つとして、国王付きの入れ替えを行わなかったのだ。王が変われば、国王付きは変わる。そんな今までの風習を、無駄だとあっさり切り捨てた。おかげで、今の国王付きたちは、現王とは忠誠の義を行なっていないのだ。それを含め、徹底的に民の排除を口にし続けてきた前王と、共存を口にする現王では考え方が違いすぎる。きな臭い噂が立つのも、ある意味仕方が無いとも言える。

「——それで、どうするつもりだ？ 民側は話し合いの場に出てくることはないだろう？」

ミズガルドの言葉にカーラは難しい顔をした。

「問題はそこよねえ……」

その時だった。

ぱんつと派手な音とともに窓が開かれた。大きな音に、ミズガルドとカーラの膝に乗っていた犬も猫も逃げ出す。

「ミズガルド！」

ただならぬ緊張を帯びた声と共に、風の少年が飛び込んできた。一緒にいるべき少女の姿はない。

椅子を蹴って立ち上がり、ミズガルドはアグロアと向き合った。

「何事だ」

「なんか胡散くつせエ事になっちまったイ」

アグロアが、いつになく硬い声で状況を話し始める。宮廷審理会。その言葉が出た時、思わずミズガルドは舌打ちした。そこに手を回せるのは国王付きぐらいだ。

「アグロア、力を貸せ」

「あいよオ！」

ミズガルドはふっと短く声を発した。

「風よ」

呪文。それは理想を象る術の一つ。式を展開する。そう難しくはない。四式で足りる。

風が身を包む。軽く床を蹴ると、体が浮いた。アグロアが何かを囁く。聞き取れない速さの呪文。それは身を包む風の上から、また風を重ねた。浮き上がりながら、ミズガルドはカーラを見下ろした。彼女もまた、表情は硬い。

「先に行く」

「ええ。すぐ追いかけるわ。こっちは馬車になるけどね」

「ああ」

浮遊の術はともかく、長距離移動は風の民の力がある。民の力は、民が慕っているものにしか貸し出すことはない。今のこの状況ならアグロアなら貸してはくれるだろうが、一人に貸すのと二人に貸すのでは力に差が出てくる。今は、とにかく急ぎたかった。

「気をつけて」

カーラの言葉に頷き、ミズガルドは大きく息を吸った。

——飛ぶ。

トステイナは後ろから吹きつけるやわらかい風に気がついた。塔の上に自然に吹く風とは違う、人為的な風だ。少しの安堵を覚えな

がら振り返った。

塔の壁に手をつくようにして、トステイナのすぐ後ろに立つ人物がいた。

少々野暮ったさのある黒髪。目鼻立ちの整った顔立ち。黒いローブ姿。

「——ティナ」

見慣れた姿。聞きなれた声。そのはずだった。そこにいたのは、ミズガルド——によく、似ていた。

すつと、頭の血が降りていくような気がした。何か、何かが、違う。

胸の奥で、理屈ではない感情が警鐘を鳴らしている。おかしい。おかしい——と。

「せん……せい？」

自分の声が震えていることに気づいた。しかし、どうしようもない。見上げる人物は、見慣れた顔で、けれど見慣れない微笑を浮かべていた。

「ああ」

——違う！

低い肯定の声に、トステイナは反射的に胸中で叫んでいた。そつと中腰で立ち上がり、距離を取る。

「ちがい……ます」

目の前の、師によく似た誰かは口元にだけ笑みを浮かべている。そつた。微笑はしているが、それは口元だけだ。眼は笑っていない。「違います。貴方は先生じゃない、です。……どなた、ですか」

すつと、手が伸びてきた。咄嗟に払おうとしたが、無駄だった。こんな場所では逃げることもままならない。強い力で手首を握られた。師と同じ声が、何かを囁いた。刹那。

「……っ！」

トステイナの全身を刺すような痛みが襲った。息がつまり、視界が白くなる。身を支える力すら抜けていく。

（せん……せい）

声も出なかった。トステイナは静かにその場に倒れ込み、意識を手放した。

火はいずこ
地は絶えた
水はまだある
風はやまない

ゆらゆらとした薄い闇の中で、誰かの声がした。それは、郷愁さえ呼び起こすような響きだった。水面に浮かぶ花びらのような、懐かしい子守唄のような、たゆたう声。

（火はいずこ）
火の民はどこへ行った？

（地は絶えた）
地の民は絶えはてた。

（水はまだある）
水の民はまだ存在する。

（風はやまない）
風の民は吹き続けている。

その歌は、グレイスの国民なら誰もが口ずさめる歌だろう。祖父も、時折口ずさんでいた。

（おじい……ちゃん）
——目を、開けた。

はじめに視界に入ってきたのは豪華な照明の掛けられた天井だった。ぼんやりとしていて、焦点が合わない。瞬きをして焦点を合わせようとすると、頭の右後ろあたりが鈍く痛んだ。

「お目覚めですか」
声。

その瞬間、トステイナは飛び起きていた。ずきりと頭が痛むが、無理やり意識をそらす。雪崩のように、眠る前の記憶が蘇ってきた。

一瞬、既視感に包まれる。あの日。森で倒れた日を思い出す。あの時はアグロアとミズガルドだった。しかし、今は、違う。そばにいるのは風の少年でも師でもない。

速くなる鼓動を持て余しながら、顔を上げた。部屋の中央にある寝台に寝かされていたようだ。部屋の端。小さな書き物机に膝をついてこちらを見ている男がいた。

見た目はやはり、師に、似ている。けれど、纏う気配は全く違っていた。

「こ……これは、どういうこと、ですか」

声が強張っている。自分で気づいた。だが、どうしようもない。服の胸元を握りしめて、まっすぐに相手の目を見据えた。揺らぎない黒瞳。何かを、蔑んでいるかのように見えた。その彼が、うつすらと口を開いた。

「お美しい髪ですね」

「え……？」

一瞬、何を言われているのか全く理解できなかった。かみ。髪……？ と、なんとか単語を理解する。無意識に自らの髪にふれて――そこでトステイナは頭が真っ白になった。

何も、考えていなかったのだ。そこにあるのはいつもどおりの金色の細い髪だと、当たり前前に思っていた。肩口に落ちた髪を手で持ち、視線を落としただけなのだ。

しかし、目から入ってきた情報は、思考をただ停止させるだけだった。

それは色だった。

――鮮やかな、それでいて深い緑。

視界に飛び込んできたその情報が何を示しているのか。何を意味しているのか。全く判らなかった。

（みど……り？）

夏に見る、死病に罹っていない木のような深く美しい緑。その色を思い出す。どくどくと、心臓の音が耳の奥でした。

「おや。驚いているのかな？」

嘲りの声。思わず肩を震わせながら顔を上げた。自分が今、酷く情けない顔をしていると理解していた。

口元にだけ笑みを浮かべた、師とよく似た——瓜二つの——面立ちの男は冷たい声音で告げてきた。

「お嬢さん。それがあんたの真実だよ」

「なん……」

声が上手く出ない。一度無理やり唾液を飲み込んで、トステイナはそつと喉を震わせる。

「なんの、ことですか」

「本当に知らなかったのかな、君は。——地の民であることを？」
地の民。

言葉が脳に届いても、上手く飲み込めない。

（地の民……？ 地……民？ わた……し、のこと？）

アグロアの姿が脳裏にちらつく。白髪の、風の少年。いつの間にか、心臓の音が頭を内側から殴りつけているかのようだった。がんと鳴り響いている。

「地の……民って……そんなことあるわけ、ない、です」

乾いた笑いが漏れる。

地は絶えた。

先ほど夢うつつで聞いた歌声を思い出す。ああ、そうか——と、気がついた。あの歌は、この男性が歌っていたのだらう。

——地は絶えた。そう、歌っていたはずなのに？

「その髪色と瞳の色が、証拠だよ、お嬢さん」

「わたし……わたしは、金髪で……っ」

「幻視。知っているかな？」

幻視。その単語はトステイナの動きを止めるには十分だった。少し前のことだ。その単語は、ミスガルドが言っていた。民が得意とする魔法だ、と。

「掛けられていたようだ。私が解いた。それだけだ。手荒な真似を

したことは謝ろう」

「なにを……」

「端的に言おう。君の力が欲しい。もちろん、ただでとは言わない。後の生活の保証もしよう」

椅子から立ち上がり、男が近寄ってきた。思わず寝台から降りた。窓際へと、後ずさる。いつの間にか靴は脱がされていたようで、裸足に床の冷たさが痛いほどだった。

「わ。わたし、力とかそんなのわからない、です……」

「地の民だ。地に関する力は強い。悪いようにはしないさ、この世界を正しくするために使う」

「わかりませ……」

嫌々をする幼子のように。弱く、首を左右に振った。そのたびに視界の隅で、緑が揺れる。息が上手く、出来無い。

上手く、出来無い――

「ティナ！」

聞きなれた声に半ば閉じかけていたまぶたを持ち上げた。強く、風が吹き付ける。背後で窓が開く音がした。振り返る。

「せん、せ……！」

反射的に手を伸ばしていた。その手がつかまれた。強く引き寄せられる。とつ、と師が床に降り立った。抱きしめられる。ミスガルドの腕に抱えられ、ようやくトステイナは大きく息を吸った。

「ティナ、ティナ、大丈夫かア。ごめん、遅くなったかア。オイラ、いろんなとこ探して……」

「アグロア……だい、じょうぶ、です」

ミスガルドの腕の中で、覗き込んできたアグロアに頷く。その頃になって初めて、トステイナは自分が震えていることに気づいた。

顔を上げると、すぐそばに師の顔があった。

顔立ちは瓜二つだ。少し離れたところでこちらを見据えている男と相似形の顔。ただし、頭の上には切り株が乗っていた。まだ、解除出来ていないのだろう。自分の失敗が招いた結果で、普段なら気

まずい要因でしかない。ただそれすら、今は『本物』だと主張しているようでほっとした。

「驚いたかい、ミズガルド」

低く、やはりどこか嘲るような響きを纏った声がした。自分の肩を掴むミズガルドの手に、ぐっと力が籠ったのを感じた。

「マイセル」

普段よりずっと、冷たい声だった。

よく似た面立ちの二人が、向かい合っていた。片方は嘲りを、片方は冷ややかな拒絶を声音にこめて。

「いや。どうか。それほど驚いていないようにも思える。まあ、お前のことだ。気づいてはいたということかな？」

「……」

ミズガルドは動かない。トステイナを抱えたまま、一步も動こうとはしなかった。

「——地の民だよ。ミズガルド。あの時」

ふと、声が一段低くなった。くつくつと、笑いを噛み殺しながら彼は続けた。

「あの時、私たちが殺しそこねた最後のひとりだ」

「黙れマイセル！」

怒声。

弾けるような大音声に、トステイナは身を硬くした。それでも、師はトステイナを抱く手を解かなかった。アグロアが心配そうな顔で見ているのが判る。

（なにを……なにを、言っているの？）

数分の間に入ってくる情報が、とてつもなく多すぎて処理しきれない。トステイナは動けず、ミズガルドの腕に捕まるしか出来なかった。

「失礼します」

不意に、空気を揺らす凜とした声音が響いた。窓とは反対側の扉が開かれる。

美しい銀髪の、頭を垂れた女性が立っていた。

「カーラ……さ」

「何用だ。上官の私室にくるとは」

冷たい声は、向き合っていた男が——マイセルと呼ばれた男が——発した。しかし、カーラは静かに受け止めたようだった。頭を垂れたまま、続ける。

「失礼しました。しかし、王が呼びですので」

「なんだと」

訝しげに、マイセルが眉根を寄せる。カーラはゆっくりと顔を上げ、無表情に告げた。

「地の民と、その師、それから師の友人を。この宮廷に呼んだのは王ですので」

「カツ……」

「ティナ」

何を言っているんですか、と叫びそうになったトステイナの口元に、アグロアが人差し指を当ててきた。分けも判らずアグロアを見ると、彼は真剣な顔で短くひとつ、頷いた。

（どうして）

疑問が、膨らんでくるばかりだった。

（どうしてこんなことになっているの。なにが起きているの）

数瞬の沈黙の後、マイセルの舌打ちが聞こえた。ミズガルドの腕が緩む。そつと解かれて、背中を押された。つんのめるように二歩前に出る。左右をミズガルドとアグロアが並んだ。そのまま、扉のほうへと歩かされる。

カーラと目が合った。強い眼差しだった。扉を大きく開き、待っている。トステイナは並んで外に出た。廊下だった。赤い敷物の引かれた、広い廊下だった。後ろで、カーラが挨拶とともに扉を閉めるのが判った。

アグロアが、大きく息を吐いてその場にしゃがみこんだ。ミズガルドも、短く息を吐くのが判った。

「カーラ、すまない。助かった」

「口から出まかせでも、ああ言っておけば王には逆らえないしね。

……間に合ってよかった」

かくんつと。唐突にひざが折れて、トステイナはその場に転倒するように座り込んだ。視界の隅で、緑の髪が踊る。座り込んで肩口に滑り落ちてくる髪も、緑だった。

「テイナ」

ミズガルドが弱い声音で名前を呼んでくる。赤い床に座り込んだまま、トステイナは壊れそうな声で訊ねた。

「せん、せい」

混乱したこの状況を理解するための、答えが、欲しかった。

「どついう、こと、ですか」

かちやかちやと音を立てながら、慣れた手つきでカーラが薬を作っていた。

その様子をぼんやりと眺めながら、トステイナは渡されたミルクの入ったカップを握り締める。

その場にいたのは五人だった。トステイナ。カーラ。ミズガルド。アグロア。そして、ネロ。初めて街に来た日に会った、あの医師の診療所にトステイナたちは来ていた。

あの後、ミズガルドは何も言ってはくれなかった。重い沈黙をやるように、カーラが場所を移そうと言い出した。結局、言われるがままついてきたのがこのネロの診療所だったのだ。

その間も、師は何も言ってはくれなかった。

最低限の言葉だけでカーラとネロは会話をし、カーラはアグロアからルーシャの実を受け取って、診療所の一室に入っていた。なんとなくその後ろを追って、全員が部屋に入る。そこは薬の調合室だったようで、カーラは無言で薬の調合を始めた。

ミズガルドは、動かない。部屋の隅で椅子に座ったまま、じっと、何かを考え込んでいるようだった。

出来上がった薄い橙色の液体を数滴、ミズガルドの頭に残ったままの切り株へと振りかける。カーラのその手順はひどく無機質で、作業的だった。カーラもまた、必要以上の言葉は発していないのだ。もちろん、トステイナの問いかけにも答えない。

しゅう、と何かが溶けるような音とともに切り株が縮んでいった。やがて、消える。その様子は、ほんの少しだけトステイナの心を軽くした。

「さて。」

緩やかな声音で、カーラが言った。空気が揺れる。

「いい加減辛気臭くてやってらんないわね。ミズガルド、話しちゃ

いなさい」

ミスガルドが顔を上げた。感情の読めない、薄い表情をしていた。

「先生……」

「君は」

平坦な声で、師が告げた。

「俺の言うことを、信じられるか」

「……」

カップを手近な調合台に置き、トステイナはゆっくり息を吸った。静かに、ミスガルドを見つめて告げる。

「信じます、先生」

少しの沈黙の後、ミスガルドが軽く頷いた。

「——どこから……話せばいいのか。君は何から聞きたい」

「……えと、じゃあ……あの人のことが知りたいです。さっきの、怖かった、人のことを」

カーラも、アグロアもネロも、誰も喋らなかった。静かに、それぞれ壁に背を預けたり手近な椅子に座ったり、宙に浮いたりしたまま、沈黙を保っていた。

「あれは、マイセルという。俺の双子の兄だ。今は宮廷魔法師の第一位……カーラの上官にあたるな」

「お兄さん」

呟きに、首肯が返ってきた。あの瓜二つの容姿はそういうことだったのだろう。ひとつ疑問が氷解し、トステイナはまた少し、ほっとする自分に気づいた。分けが判らない、理解できない。それは、知っていて判る恐怖よりずっと不安になる。知らないより、知るほうがいい。

「判りました。じゃあ……あの人の、言っていたことを知りたいです。……わたしの、ことを」

誰かが息を吐いた音が聞こえた。ふっと、師が微笑んだ。柔らかで、けれど何かを諦めたかのような笑みだった。

「歴史の講義とでも思って聞いてくれ。昔、俺が生まれた頃に戦争

が始まった。民と人の間でな。きつかけはいろいろ言われているが……まあ、始まってしまえばどうしようもないものだろう。俺とマイセルはまだ子供だった頃に街も親も失った。正直なところ、君が生きていくために魔法を、という気持ちは良く判ったんだ。俺もそうだった。マイセルは判らんが」

懐かしそうに、痛ましそうに、少し目を伏せてミズガルドは続ける。

「馬鹿だったな。無理やり詰め込んで、ものにした。正直汚い手も使ったが、とりあえず宮廷魔法師にはなった。それがどういうものかも判らずに」

膝の上に組んだ指を見下ろしながら、ミズガルドはどこか自虐的な笑みを浮かべている。

「まだ、戦時だった。当然宮廷魔法師は戦にも赴く。派遣された村は……地の民の村だったんだ」

「地の……民」

「火はいずこ」

アグロアが言葉を割り込ませてきた。目をやると、なぜか少し泣き出しそうな面立ちで、アグロアは口を開いていた。

「知ってツかな、ティナ。そういう歌」

「知ってます。おじいちゃんも、時々口にしてました」

「そっかア。……火はいずこ、地は絶えた、水はまだある、風はやまない。……あれサ、時代とともに文言変わってんだアね。オイラが昼間に歌ってたヤツ、あれはあの歌の、最初の頃の、みいんなして楽しかった頃のなんだア」

「そつ、なんですか？」

「うん。だからサア、地だって、ちいと前まではいたんだ」

ミズガルドが頷く。

「いたんだ。確かに。いや、いる、だな。——君だ、ティナ」

見つめられ、ティナはきゅっと胸元を握り締めた。思わず視線を逸らしたくなったが、その衝動を押さえつけ、ミズガルドと正面か

ら視線を交差させた。

「わたし」

「地の民だ。その髪色も、瞳の色も。君は確かに地の民なんだ。――噂は前からあった。俺は、確かめこそしなかったとはいえ、マイセルの言葉を否定できない。知っていた、ことになるんだろう。黙っていてすまなかった」

言葉が上手く出て来なかった。トステイナは自らの鼓動の音を聴きながら、ゆっくり口を開く。

「先生は……」

（――その時のお仕事をどうされたのですか？）

続けたい言葉はあったのに、言葉が音に乗らない。乗れば、それは痛みを伴って返ってきそうだった。

しかし、ミズガルドは音にならない言葉を察したのだろう。すつと立ち上がると、こちらに背を向けるように窓から外を眺めた。背中では、答えてきた。

「俺とマイセルは、仕事を遂行した。その時からあの歌で地は――地は絶えた、と歌われ始めた。スレヴィの森にも死化が広がった。理由は判るだろう」

判る。判るが、理解りたくはなかった。何も言えず、トステイナは俯いた。

地の民。何の事なのか判らない。唐突に地面がなくなったかのような不安定な感情が、ゆらゆらと揺れ動いていて形を成さないようだ。

「せん、せい」

震える声が、聞かないほうがいいであろう事を聞こうとして口をついた。止められなかった。

「わたしは、人じゃないんですか？」

「……民だ。しかし民もまた、人と同じだ。詭弁のように聞こえるかもしれないがな」

ミズガルドが振り返った。緩やかな笑みが痛くて、トステイナは

俯いた。言葉がもう、出てこない。

俯いたトステイナの頭に、誰かの手が触れた。驚いて振り返ると、ネロが困ったような顔で微笑んでいた。

「混乱しているでしょう」

「……ネロさん」

にこりと、やさしく微笑まれた。

「カーラ、それから引きこもり坊ちゃんと風の子」

「……誰のことだ」

「あんたですよ、ミズガルド。部外者がこういうのもあれですけど、いろいろ、急すぎるんじゃないですか。大人はいつも、事をいそぎすぎますから。ね」

ね、と微笑まれ、トステイナはあいまいに笑って見せた。笑えるだけの心が残っていたことが、少し自分でも驚いた。

そのまま、ネロは頭をくしゃりと撫でて来た。

「テイナ？　大丈夫ですか？」

「えと……」

「もし良かったら、一晩うちに泊まりますか？」

唐突な申し出に、トステイナは思わず目を見開いた。

「ミズガルドの家にいるのがつらいなら、です。どうですか？　ミズガルドは？」

「……そうだな。少し、時間をおいたほうがいいだろうな。俺は今、普通に接することが出来そうにない」

あいまいに微笑まれた。カーラも、アグロアも何も言わない。トステイナは、自分に決定権が託されていることを理解した。目を閉じ、茹るような頭をそつと手で押さえながら呟いた。

「ネロさん」

「はい」

「……おねがい、しま、す」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2309w/>

天才魔法使いの天災な弟子

2012年1月4日10時07分発行